



靖国神社遊就館前の特攻勇士之像

会 報

特 攻

平成29年5月

公益財団法人
特攻隊戦没者慰霊顕彰会
〒102-0073
東京都千代田区九段北3-1-1
靖国神社遊就館内・地階
電話 03 (5213) 4594
FAX 03 (5213) 4596
<http://www.tokkotai.or.jp>
振替口座 00140-6-59580
編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 シダ印刷株式会社

〈目次〉

慰霊祭等参加報告

第38回特攻隊全戦没者慰霊祭（金子敬志）……………2
第五十回戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊慰霊祭に参列して
（藤田幸生）……………6

平成28年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に
参列して
（及川昌彦）……………9

世田谷山観音寺特攻平和観音月例法要報告

1月（倉形桃代）……………20
2月（金子敬志）……………21
3月（片山幸太郎）……………22

一般記事

天皇・皇后両陛下、ベトナム、タイ御訪問
（飯田正能）……………10

神武東征にまつわる一つの謎（飯田正能）……………15
神話を否定する民族は滅びる（飯田正能）……………17

会員投稿

笑顔の祖母から笑顔を継ぐ（佐藤花）……………24
機付長の記憶 特攻機を中心とした原町特攻隊史
（大槻健二）……………26

事務局からの報告等

平成28年度事業報告……………39
平成28年度正味財産増減計算書……………41
報告・連絡事項……………42

第38回特攻隊全戦没者慰霊祭

平成29年3月25日(土) 11時～12時

於 靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱

トランペット 堀田 和夫

修拔、献饌

祝詞奏上

祭文奏上 理事長 藤田 幸生

献吟 一誠流 吉野 一心

笛 逢坂 龍信

○護国隊長 遠藤 栄 作

昭和19年12月3日オルモック湾で戦死

身はたとえ万朶の桜散りゆくも

留り護らん皇(すめろぎ)の空

○菊水三号菊水部隊天桜隊

田熊 克省 作

昭和20年4月16日 沖繩周辺で戦死

大君の御楯(みたて)となりて吾は今

翼休めん靖国の森

奉納演奏

世田谷コーラル・エーデ合唱団

指揮 大穂 孝子

トランペット 堀田 和夫

「ふるさと」二題

全員斉唱 「同期の桜」 「海ゆかば」

昇殿参拝 参列者一同

黙 祷

「国の鎮め」

トランペット 堀田 和夫

3月25日(土) 11時より、靖國神社に

おいて第38回特攻隊全戦没者慰霊祭が

催行され、御遺族約30名を始め御来賓、

戦友、一般会員等を合わせ245名の

方々が参集し、英霊に哀悼の誠を捧げた。

昨年までは陸軍・海軍合同で行うと言う意味で合同慰霊祭としていたが、陸軍・海軍と分ける必要はないのではないかとの意見があったので、検討の結果、特攻隊の全戦没者を慰霊するとして「特攻隊全戦没者慰霊祭」と呼称することとなった。

3月末の最終土曜日の開催であるのでちょうど桜の開花時期と重なる。

今年の開花宣言は3月21日と全国で一番早かったが、開花後肌寒い日が続いたためか、境内の桜は4～5分咲きであった。

慰霊祭は、式次第に従い、堀田和夫氏のトランペット伴奏に合わせた「国歌君が代」斉唱により始められた。修祓、献饌、祝詞奏上に続き、昨年理事長に就任した藤田理事長が祭文を奏上した。



祭 文

特別攻撃隊で戦没された、ご英霊の皆様
に申し上げます。

今年も平和平穩のうちに、私達一同が、
靖国神社の社前に集い、お参りすること
が出来ますことに、ここから感謝申し
上げます。

皆様方は、70有余年前、我国の存亡に際
し、自らの身を賭して、ご家族、ふるさ
と、そして日本を守るために、散華され
ました

私達は、皆様方に対し、心からの感謝と、
敬意を奉げます。

皆様方の行動のお陰で、現在の平和で繁
栄した日本があり、そして、国際社会の
中でも、平和国家として、その存在価値
が認められ、人類発展のために、貢献し
てきております。

改めて過去を顧みますと、皆様方は、70
有余年前、空に、海に、陸に、あらゆる
手段をもって国の守りに身を捧げ、この
日本という国をお守りいただきました。

結果として国は敗れましたが、このこと
は、我国のみならず、人の世に、燦然と
輝く、語り継ぐべき偉業として、残され
てきております。

世界の現状を観ますとき、今年も、今日

も、たった今も、皆様方の行為が、我国
の平和の礎になつてゐることを、感じず
には居られません。また、心ある外国の
人々も、そのことを十分認識されており
ます。

我国は、先の大戦で、死力を尽くした戦
をしました。その後、この70有余年の間、
武を収め、平和憲法を制定し、平和平穩
を維持し得てきました。そして、地球上
で奇跡といわれるような発展を遂げてま
いりました。このことは、世界の歴史上、
類を觀ないことであります。

この間にも、世界の各地では、民族、宗
教、主義主張、国境等による争いや戦争
が、絶えたことはありません。今も尚、
その戦いは、空間、手段が、広く、強く、
高度に強大化した中で、絶えることなく
続いております。

その抗争、紛争、戦いの様相は、その物
理的能力の拡大が、人類の精神的制御能
力の向上を逸脱超越しそうな勢いで、広
域化、強大化してきているように伺えま
す。

これ等の変化の延長線上に予測されるも
のとは、地球上人類の破滅であるように
さえ伺えます。私達は、その方向にすす
むこと、それだけは避けなければなりま

せん。

皆様方のお導きにより、次は、私達がそ
の先頭に立つて、努力する立場にあるの
ではないかと思えてくるのです。

世界の情勢は、今、正に激動の中にあり
ます。

在天の皆様、どうか私達をお見守りくだ
さい。そして、お導き下さい。

皆様方の、安らかならんことをお祈り申
し上げ、祭文といたします。

平成29年3月25日

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田幸生



心を込めた祭文奏上の後、一誠流吉野一心様、笛 逢坂龍信様による献吟が奉唱された。

続いて、世田谷コール・エーデ合唱団による「ふるさと」二題が奉納演奏された後、全員が「同期の桜」「海ゆかば」を斉唱した。

拝殿における行事が終わり、参列者は本殿に昇殿して玉串を奉奠して、参拝した。

最後に、堀田和夫氏によるトランペット演奏「国の鎮め」に合せて黙祷を捧げて慰霊祭は終了となった。

この後、昨年と同様、遊就館前にある「特攻勇士之像」に対する献花が行われた。

御遺族代表（神州不滅隊 谷藤徹夫少尉の御遺族 吉田ひろみ様）御来賓代表（福岡県偕行会相談役 陸士57期 菅原道之様）当頭彰会代表（杉山蕃会長）のお三方が献花し、参列一同は代表に合せて礼拝した。

以上を持って慰霊行事は全て終了し、靖国会館に於いての懇親会に移行した。

第38回特攻勇士慰霊祭懇親会

平成29年5月25日（土）

12時30分～14時

於 靖国会館2階「九段の間」「田安の間」「玉垣の間」

開式の辞

事務局長

石井 光政

副理事長挨拶

副理事長

岩崎 茂

頭彰会会務説明

専務理事

衣笠 陽雄

遺族・来賓紹介

事務局長

石井 光政

献杯 遺族代表

白田 智子

懇談・会食

斉唱「海ゆかば」

堀田 和夫

トランペット

堀田 和夫

来賓代表挨拶

靖國神社権宮司 小方 孝次

慰霊祭及び献花式終了後「靖国会館」

に移動し、同会館2階の「九段の間」

田安の間」「玉垣の間」において懇親

会が開催された。

石井事務局長の開式の辞に続き岩崎

茂副理事長より挨拶があった。

岩崎副理事長は昨年就任以来、防衛大臣政策参与として、又、前統合幕僚

長として多忙な中、積極的に各地の慰

霊祭に参加しているが、主催者等とお

話をする、会員及び参加者の減少を

心配する声が多いとのことであった。

そのような中、山口県周南市の天津

島で開催される回天慰霊祭は「回天」



岩崎副理事長の挨拶

の名前を入れたヨットレース（周南ピースカップ回天メモリアルヨットレース今年も開催が予定されている。）の開催、中学・高校生の慰霊祭行事への参加などの工夫をされている事を紹介し、次世代への継承が大切と考えるので、顕彰会としても新しい人の入会を進めてゆくが、良い知恵があったら教えて頂きたいと要望した。

次に顕彰会の事業として進めている特攻勇士の像の建立事業について言及した。



衣笠専務理事による事業報告

目標は全国47都道府県への建立であるが、現在の建立数は16と目標の3分の1、未建立の各県護国神社への働きかけを強調した。

次に衣笠専務理事により28年度の事業報告と会員数の動向、29年度の事業計画の説明が行われた。

27年度は会員数の増加がみられたが28年度は再び減少となり会員数は1870名との事である。

また、前回までは「特攻隊合同慰霊祭」であったが、陸軍、海軍合同ではなく、特攻隊として戦没された方々を



白田智子様による乾杯

慰霊するとして、名称を「特攻隊全戦没者慰霊祭」と変更した旨説明があった。

終了後、石井事務局長による遺族・来賓の紹介がなされた後遺族代表、第二十三振武隊長 伍井芳夫中佐令嬢 白田智子様の音頭により乾杯が行われ、その後、懇談・会食となった。

途中、神社拝殿に於いても献奏した堀田和夫氏によるトランペット演奏に合わせて全員により「海ゆかば」を斉唱し更に会場の雰囲気が高まった。話は尽きなかったが時刻になったので、

来賓を代表して靖國神社権宮司 小方考次氏のご挨拶を持って懇親会は閉会となり、第38回特攻隊全戦没者慰霊祭は全ての予定を終了した。

終了後、慰霊祭支援者が靖國神社遊就館地下にある顕彰会事務室に集まり、昨年と同じように反省会が行われた。反省会の締めとして藤田理事長による講評が行われた。

評価は91点と高得点であったが、これに満足せず、次回は満点を取るよう努力する事を誓って散会した。

(金子敬志記)

第五十回戦艦「大和」を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭に参列して

理事長 藤田幸生

第五十回目の、戦艦「大和」を旗艦とする第二艦隊戦没将士の慰霊祭に参列してきました。

四月六日から八日まで、岩崎副理事長との二人の旅でした。副理事長は、徳之島は初めてということでした。

今年の慰霊祭は、五十回目の区切りということ、半世紀振りに皇族（三笠宮彬子女王殿下）をお迎えして催行されました。



戦艦大和慰霊塔

この慰霊塔は、50有余年前に、旧日本海軍最後の特攻艦隊として出撃した戦艦「大和」を旗艦とする第二艦隊の戦没者慰霊塔として、戦友やご遺族等の手によって、ここ大田布岬の広い芝生の原に建立されたものです。この芝生の広場は、地元出身の宇都隆史参議院議員のお話によると、児童生徒達の遠足の場所だったそうです。慰霊塔の設計者は、後に文化勲章を受章された、鹿児島県出身の中村晋也先生です。慰霊塔の高さは、二十メートルを越える戦艦「大和」の艦橋の高さがあります。



海炎の像

この塔に向かうと、その向こうに「大和」の眠る東シナ海が広がります。艦橋から見下ろす艦首の位置に当たる磯の上に、「海炎の像」の彫刻が建っ

ています。犬田布岬は、強風雨塩害に晒される厳しい気候の場所です。大樹は、育ちません。

私は、自衛隊退職後の十五年ほど前から、ご縁があつて、この塔の修復事業等に携わつてきました。そのことで、地元の皆様とも、永年苦労を共にしてきたという気持ちが強くなり、深い思い入れがあります。

私の参列は、六、七回目くらいになりました。今年も参列者は、ご遺族、生き残り戦友を始め、鹿児島県出身の国会議員、県知事、自衛隊・・・陸自熊本8師団長、海上自衛隊からは、海幕長、一空群司令以下、艦艇、航空機、音楽隊等を挙げての参加となり、例年より盛大でした。

(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会からは、岩崎茂副理事長と私が、参列しました。

(公財)水交会からは、齋藤理事長、町田慰霊委員が、参列していました。齋藤理事長は、超御多忙の中、日帰りの参加となり、式典後、直ちに佐世

保に向かわれました。

私達の他、主な参列者を、まとめて見ますと、次のとおりです。

三笠宮彬子女王殿下、尾辻秀久参議院議員、金子万寿夫衆議院議員、宇都隆史参議院議員、三反園訓鹿児島県知事、村川豊海上幕僚長、それに本松第八師団長でした。

戦艦「大和」を旗艦とする日本海軍最後の艦隊が、昭和二十年四月七日の午後二時十分過ぎに、この犬田布岬の沖で撃沈されました。このときと同じ「月日時」を期して、毎年この場所で、地元伊仙町が、慰霊式典を挙げてくれております。

例年式場となる、この岬周辺は、曇天強風で寒く、冷たいことが多いのですが、今年は、曇天ながら、温かく穏やかでした。厳かに慰霊祭を執り行うことが出来ました。彬子女王殿下をお迎えした島民はじめ、多くの皆様の気持ちですが、ご英霊に通じたものと想われます。

彬子女王殿下は、前夜の歓迎夕食会、

当日午前の島内ご視察、午後の慰霊祭、闘牛参観、夕刻の交流会と、在島中の過密なスケジュールのなかで、徳之島を挙げての歓迎諸行事に、常時、にこやかな笑顔で、和気藹々とした雰囲気でもまれておられました。このことは、今回の慰霊祭を、成功に導いた、最大のご功績でありましょう。感謝です。



交流会

今回の慰霊祭は、例年になく厳かで、立派に整いました。関係者の皆様のご努力に、感謝と敬意を表したいと思えます。ただ、戦友、ご遺族の参列が、少なかつたのは、ご高齢とは申せ、少

し寂しく、時代の変化を感じさせられました。特に、「矢矧」生き残り建築家の池田武邦様、また、文化勲章を受賞された慰霊塔設計者の中村晋也先生には、お目にかかりたかった。

暖かく、穏やかな、曇り空の下、祭典は、伊仙町の職員の皆さんの進行で、島民各世代参加の下、整齊と、滞りなく円滑に進められました。

海自鹿屋基地から飛来した2機のP3C編隊の上空通過、東シナ海での任務帰投中の2隻の護衛艦の汽笛吹鳴は、慰霊祭に相応しく、感動的でした。

海自佐世保音楽隊の演奏の中で、「鎮魂同期の桜」は、遠くの洋上にまで伝わり、「ご英霊の元にも届いたもの」と感じられました。

更に、私にとつて嬉しかったことは、過去十余年にわたる、様々な過去のわかだかまりを水に流して、徳之島三町、NPO等、島全体の心が一つになったと感じられたことでした。このことは、女王殿下を前にして交流会の席上でも、皆さんに申し上げました。これからの

慰霊祭実行、慰霊塔維持整備の体制つくりの見通しがつきました。これは、大久保明伊仙町長のお心の広さから、生まれたことで、感謝感激でした。

帰宅後、顕彰会前役員の大穂孝子さま(慰霊祭コーラス指揮者)から頂いたメールです。

『23年前 私もこの場所の慰霊祭に参加しました。毎日ここで遺骨が流れてくるのを待っている と言う老婦人に出会いました。拜んでいる形の慰霊塔の下で、たった一人で座っておられました。声をかけしばらく話したのを思い出します。』

最後に、私が考えた、「ごあいさつ」を、添付して、この報告を終わります。

戦艦「大和」を旗艦とする第二艦隊

平成二十九年慰霊祭 「ごあいさつ」

この眼の前に広がる東シナ海遙か洋上には、戦艦「大和」を旗艦とする第二艦隊特別攻撃隊の「ご英霊の皆様が眠っ

ておられます。

今年は、三笠宮彬子女王殿下を、この徳之島大多布岬慰霊塔の前にお迎えし、平和平穩のうちに、盛大な慰霊祭を催行することが出来ました。

ご英霊の皆様も、さぞやお喜びのことと存じます。

七十有余年前の我が国の国難に際し、自らの身を賭して、「ご家族、ふるさと、そして日本を守るために散華された皆様方に対し、心からの敬意と感謝を捧げたいと思います。

皆様方の勇気ある犠牲的精神のお陰で、現在の平和で繁栄した日本があり、そして、その行為は、真実が伝わるにつれ、世界の心ある人々に、高く認識されてきております。

私達の目の前には今、東シナ海が、穏やかに広がっております。皆様方は、今もこの沖で、我国の平和の礎となり、領土と、平和を守ってくれているのです。

国際社会は今、再び、混乱の方向に進んでいつているようにうかがえます。世界の各地では、民族、宗教、主義主

張、国境等による争いや戦争が絶えません。しかも、その戦いは、空間、手段が、広く、強く、高度に強大化しております。それゆえに、私達は、あのときの過ちを、二度と繰り返してはなりません。

もつと、もつと大局的な視野に立つて、もつと長期的に物事を観て、大きな勇氣を持つて、誤りの無い道を歩んでいかなければならないのです。それは、多くの犠牲を伴う、困難な道かもしれない。しかし、あのときの、皆様方の行為を想えば、その末裔として今を生きる私達に、それが出来ないわけがないのではないかと想っております。

私達は、世界に例の無い二千年の歴史を耐え抜き、今の世を生き続けているのです。この間に得た祖先からの多くの知恵を受け継ぎ、生き続けていく糧としていきます。

それらの知恵に学び、これからの未来に向かつて、自信を持って、平和平穏な道を歩み続けてまいりたいものです。ご英霊の皆様、どうか、私達にご加護

を賜りますよう！

皆様方の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げて、ご挨拶いたします。

平成二十九年四月七日

(公益財団法人)

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田幸生



平成28年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式に参列して

評議員 及川 昌彦

平成28年11月13日(日)山口県周南市(旧徳山市)大津島の回天記念館前において、標記の追悼式が晴天の下で執り行われ岩崎茂副理事長とともに参列しました。

参列者はご遺族55名・来賓・一般招待者約170名の合計約230名でした。

追悼式は11時半の開式のことばより国歌斉唱・黙祷・原田茂回天顕彰会会長の式辞から来賓による追悼のことばが次の順に述べられました。

- ・安部晋三内閣総理大臣代読
- ・木村健一郎周南市長
- ・池太郎海上自衛隊呉地方総監
- ・村岡嗣正山口県知事代読

献吟の後、参列者全員による献花が男性合唱団メルソレイネによる追悼合唱を伴奏に行われました。献花を渡すのは地元の太華中学・和田中学よりそれぞれ2名の生徒さんでした。

追悼飛行は海上自衛隊小月教育航空

群よりT-5×3機・航空自衛隊防府北基地よりT-7×3機でした。

追悼電文奉読後、大徳山太鼓「回天」保存会による豪快な太鼓演奏と藤間流名取藤間悠栄氏による舞「海ゆかば」が奉納されました。

続いて回天顕彰会の会長挨拶・遺族代表の挨拶があり12時50分に終了しました。

原田会長は平成22年から同会長に就任しておりますが、同会長としては初めての旧軍経験のない会長とのことでした。

会長就任以降、回天の事を如何に後世に伝えるか、また、当時戦死された方々の事を理解してもらうかに尽力されているとの事でした。

今回は追悼式に初めて5名の中高生が献花の補助として参加してくれました、回天基地があつたこの大津島を平和の文化発信地として一昨年は「ピースカップ回天メモリアルヨットレース」を開催し、今年の追悼式の前日（11月12日）には県内中学・高校生を対象にした「平和の島スピーチコンテス

ト〜いのちのいのり〜」を開催し回天の歴史を後世に伝え回天顕彰会の若返りを進めているとの事でした。今回遺族の中に回天を創案し自ら訓練中に殉職した黒木博司少佐の未亡人も参列されました。



献花補助する地元中学生



大徳山太鼓演奏

飯田正能様は去る4月19日急逝されました。

飯田様は平成19年5月から会報の編集長として活躍され、当顕彰会の発展に多大の貢献をされました。

また多数の記事を寄稿され、会報の内容充実にご尽力されました。本号の記事が御遺稿となります。飯田様のご冥福をお祈り申し上げます。

金子 敬志

天皇、皇后両陛下、ベトナム、タイ御訪問 評議員 飯田正能

天皇、皇后両陛下には、今年2月28日から3月5日まで6日間の日程で、ベトナムを国賓として行幸啓され、その後、昨年10月に逝去されたタイ国王プミポン殿下の弔問のため、タイ国をご訪問された。これまで両陛下は、大東亜戦争における太平洋の激戦地（サイパン、パラオ・ペリリュー島、フィリピン・マニラ・カリラヤ国立墓地）の戦没者慰霊の旅を重ねてこられたが、



晩餐会でベトナムのチャン・ダイ・クアン国家主席夫妻と乾杯される天皇、皇后両陛下（1日夜、ハノイの国家主席府で）＝代表撮影

今回のベトナム御訪問は、日越間の長い交流の歴史を踏まえての、友好親善の旅であり、我が国の皇室とは長い友好親善を果たしてこられたタイ国王に対する哀悼の旅でもあった。

ベトナム御訪問では、3月1日夜、首都ハノイの国家主席府でのチャン・ダイ・クアン国家主席が主催する歓迎晩餐会に出席され、国家主席夫妻を始めとする同国関係者のもてなしに謝意

を伝えるとともに、日越両国の交流がますます深まることを願われた。

天皇陛下は、晩餐会のお言葉で、両国間の長い交流の歴史を振り返られ、ベトナムの僧が、奈良・東大寺の大仏開眼式で舞を奉納したという言い伝えや、16〜17世紀に貿易の拠点として栄えた同国中部のホイアンに日本人町ができたことなどを紹介され、また、20世紀初頭には、日本への留学を奨励する運動がベトナムで起きたことにも触れられた。

天皇陛下は、両国の交流が文化や福祉など多方面に広がっていることを喜び、「私どもの訪問が、両国民の相互理解と友好の絆を更に強める一助となることを心から願っています」と結ばれた。一方、クアン国家主席は、挨拶の中で、「日本は真の親友であり、最も長期的なパートナーである」などと述べ、改めて歓迎の思いを伝えた。また、両国が春の季節を迎えつつあることに例えて、「両陛下の御訪問が、両国の友好協力関係に新たな春を与えるものと確信します」とも述べた。

晩餐会の会場には、伝統衣装のアオザイを着た女性たちの姿もあり、華やかな雰囲気、両陛下が囲む円卓には、「ハノイ風四角春巻き」や「宮廷風ツバメの」菓スープなどの料理が並んだ。

晩餐会には、両国政府から「特命大使」に任命されている俳優の杉良太郎さん（72歳）らも招かれた。杉さんが支援するベトナムの視覚障害児らが、音楽プロデューサーの小室哲哉さん（58歳）と一緒に、民族楽器で「赤とんぼ」などを演奏すると、両陛下は笑顔で拍手を送られた。

両陛下はこの日、国賓としての歓迎式典や国家主席夫妻との会見のほか、ベトナム建国の父、ホー・チ・ミンの遺体を安置した霊廟も訪れられて供花され、30秒以上にわたって静かに黙祷を捧げられた。

一方、ベトナムの各紙は、1日、両陛下の初の御訪問を大々的に報じた。共産党機関紙ニャンザンは「越日の友好協力関係における歴史的契機」と題した社説で、「両国関係を全面的に、また、より深く発展させる力となる」

と指摘した。英字紙ベトナムニュースも「両国関係に新たな章を開くもの」と1面トップで報じた。

○ 晩餐会での天皇陛下のお言葉

「この度クアン国家主席閣下のご招待により、皇后と共に貴国を初めて訪問することを誠に喜ばしく思っております。今夕は、私どものために晩餐会を催していただき、また、国家主席閣下から丁寧な歓迎の言葉を頂き、心から感謝いたします。

またこの機会に、私どもの子供である皇太子や秋篠宮夫妻が、かつてこの地を訪れました時に、貴国の皆様から受けた様々なお心遣いに対しても深くお礼を申し上げます。

近年、国家主席閣下を始め、貴国の指導者が我が国をご訪問になり、その際私どもに貴国訪問のご招待を頂いてまいりました。そうした中で、今回、貴国を訪れることができたことを感慨深く思っております。

貴国と我が国の間では、昔から数々の交流が積み重ねられてまいりました。歴史をたどると8世紀には、当時我が

国の都であった奈良で大仏開眼の儀式が行われましたが、その際、現在のベトナム中部にあった林邑(りんゆう)の僧侶・仏哲(ぶつてつ)により舞が奉納されたと伝えられています。その時の林邑の音楽は、我が国の雅楽の楽曲として現在でも演奏されています。今回、かつて林邑が栄え、また、ベトナムのグエン朝の都であったフエを訪問します。その地で我が国の雅楽と源を分かち合うニャーニャックを聞くことを楽しみにしております。

また、16世紀から17世紀にかけては、国際貿易港として栄えたベトナム中部に位置するホイアンに、我が国から多くの交易船が訪れ、日本人町もつくられました。

その後、我が国の鎖国政策により、貴国と我が国の交流は途絶えましたが、20世紀初頭には、「東遊(ドンズー)運動」の下、約200名の貴国の青年たちが我が国に留学していたこともありました。

1973年に日越両国の外交関係が樹立されてから既に40余年、その間、

両国の交流はますます拡大し、現在我が国には、約18万人のベトナム人が留学生、技能実習生などとして滞在しています。その中には、将来我が国で看護師、介護福祉士として活躍することを目指して、病院や福祉施設で働きながら研修をしている約500名の人たちもいます。明日、文廟(ぶんびょう)において日本に留学していた人たちを始め、日越両国の交流に携わる人たちとの会合の機会を持つこととなり、楽しみにしております。

近年、貴国では、日本語を教える小学校もできるなど、日本語学習への関心が高まっていると聞いています。一方、我が国でも多くの企業がこの地の生産などに関心を高めており、ベトナムに居住する日本人の数も今や約1万5000人に上っています。日越両国において、それぞれの文化を紹介する催しも各地で開催され、お互いの音楽や食事などを多くの人々が楽しんで、いることを大変うれしく思っております。

両国民の交流がますます深まり、お

互いの文化への親しみが増してきている今日、この度の私どもの訪問が、両国民の相互理解と友好の絆を更に強める一助となることを心から願っています。

ここに杯を挙げ、クアン国家主席閣下並びに令夫人のご健勝と貴国の国民の幸せを祈ります。」

次いで、翌3月2日午後ハノイの宿舎で、天皇、皇后両陛下は、戦後も同国に留まり、フランスとの独立戦争に加わった「残留日本兵」の家族15名と面会された。戦争が原因で別離を余儀なくされた辛い過去を持つ人々に優しく寄り添われた。両陛下の誠実なお人柄に触れ、集まった家族たちの目には感激の涙が溢れた。

天皇陛下は真つ先に、家族の中の最高齢者グエン・ティ・スアンさん（93歳）に「色々のご苦労もあつたでしょう」と声を掛けられ、皇后陛下はスアンさんの前で膝を突かれ、涙を流してお礼の言葉を繰り返す彼女の体を何度も抱き寄せられて、その思いを受け止められた。



両陛下 元日本兵家族と面会
ベトナム訪問中の天皇、皇后陛下は2日午後、先の大戦後も同国にとまりフランスとの独立戦争に加わった残留日本兵の家族と面会し、言葉を交わされたハノイで。代表撮影

両陛下は、他の家族たちにも一人ひとりに誠実に耳を傾けられ、面会時間は予定の倍以上の34分に及んだ。95歳になる父親が大阪で暮らしているというホン・ニャ・クアンさん（66歳）は「今までの辛さや苦しみは、今日で全て消えた」と喜び、「天皇陛下のお声は心に響き、握手したお手は父親のよいな感じがした」と言いながら目を潤ませた。

両陛下はこの後、生物学博物館を視察され、天皇陛下が1976（昭和51）年に新種として学会に発表され、その後ベトナムに寄贈された同国産のハゼの標本などを見て回られた。

夜は、在ベトナム大使梅田邦夫妻が主催したレセプションに出席され、ベトナム戦争で米軍が散布した枯葉剤の影響とされる結合双生児として生まれ、日本の医師団の協力によって分離手術を受けた「ベトちゃん、ドクちゃん」の弟グエン・ドクさん（36歳）夫妻（兄のベトさんは既に亡くなっている）らと懇談された。天皇陛下はドク



梅田邦夫ベトナム大使夫妻主催のレセプションで、グエン・ドクさん夫妻（前列右から3人目、2人目）と言葉を交わされる天皇陛下（2日午後、ハノイで）。代表撮影

さんと笑顔で握手され、「ドクさんがこうして元気にされていることを嬉しく思います」と声を掛けられた。ドクさんは「日本とベトナムの懸け橋として、関係強化に貢献したいと思っております」と話し、日本に対する思いを込めて2人の子供に「富士」と「桜」を意味する名前を付けていることを紹介した。

両陛下は翌3日午前、ハノイ北部にある同国共産党の別荘で、グエン・フー・チョン書記長夫妻と面談され、この後宿舎を訪れたチャン・ダイ・クアン国家主席夫妻にお別れの挨拶をされ、政府専用機で同国中部の古都フエに向かわれた。フエでは古都の遺跡や雅楽の源流と言われる舞楽を鑑賞されるなどされた。

天皇、皇后両陛下は5日、6日間のベトナム御訪問を終えて、現地時間午後2時前、タイのバンコク・ドンムアーン空軍基地に到着された。宿舎のホテルでは、前国王の次女シリントン王女の出迎えを受けられた。

休む間もなく同5時半過ぎにはホテ

ルを出られて王宮に向かわれた。王宮では、タイの侍従長の案内で、前国王の遺体が安置された「ドウシット・スローンホール」に入られた。喪服姿の両陛下は、金色に飾られた祭壇の前で深々と拝礼され、僧侶の読経に身じろぎもせず聞き入られた。拝礼後は、前国王の肖像画が掲げられた記帳所に移動して「明仁」「美智子」とサインをされた。

続いて両陛下は、昨年12月に即位されたワチラロンコン新国王と会見された。宮内庁によると、新国王との会見は、通訳や側近も同席せず、両陛下と新国王だけで行われたという。「(プミポン) 国王陛下と私どもは、半世紀を超える親しい交流を重ねてきており、最後のお別れをし、新国王に弔意を表したい」と、先月28日、天皇陛下は羽田空港出発に当たり、タイ訪問に込めた思いを明かされた。5日の弔問の機会は、陛下の強い御意向を酌み、先に決まっていたベトナム公式御訪問の日程を1日延ばす形で設けられた。

天皇陛下は昨年10月、前国王逝去の



プミポン前国王の祭壇の前で拝礼される天皇、皇后両陛下(5日午後、バンコクの王宮で) 代表撮影

報に接すると、皇后陛下と共に3日間の喪に服された。逝去の翌日には、シリット前王妃へ私的に弔電を送られ、在日大使館への弔問に侍従長を差し遣わされた。天皇陛下のタイ御訪問は、皇太子時代を含めると計9回を数える。プロペラ機時代には、欧州などを訪れ

る際にしばしば給油地として立ち寄られ、前国王との交流を重ねられた。前国王も、陛下が公式訪問された時には、常に歓待の先頭に立ち、離宮に招かれたり、自ら車を運転して地方を案内されたりと、手厚くもてなされた。天皇陛下と前国王との間には「プラーニン」という魚を巡る有名なエピソードがある。アフリカや中東などに広く分布し、日本では「ティラピア」と呼ばれるこの魚は、今やタイの食卓には欠かせない大衆魚となっているが、魚類学者でもあらせられる陛下は、1965（昭和40）年、国民のたんぱく質不足に頭を悩ませておられた前国王に、養殖に適した種類50匹を寄贈された。これが切っ掛けとなって、「王室プロジェクト」の名の下に盛んに養殖されるようになり、タイの食料事情の改善に大きく貢献した。国民の幸せを願い、全身全霊で務めを果たしてこられた「盟友」に、今生の別れを告げられた陛下の悲しみと寂しさの御胸中は、お察しするに余りあるものがあるう。

神武東征にまつわる一つの謎

評議員 飯田 正能

神武天皇東征の経路の中で、記紀研究者の多くが、何故、神武一行が宇佐から安芸に直行しないで、関門海峡を抜けて玄界灘に出、遠賀川周辺を行き来したのか、そしてそこに、岡本宮を造営し、古事記によると、約1年、日本書紀の記述によると約1カ月間滞在したのか、という疑問を持っている。

そのことに一つのヒントを与えてくれたのが、宮内瑞生著『誰も書かなかった神武天皇と卑弥呼の関係』（株高木書房・平成21年2月23日発行）という一書である。この本は、「神武戦史研究会」という防大3期ないし16期の航空自衛隊OBを中心とする戦史研究会でチームを編成し、全国に約400以上あるという、神武天皇を祀る神社や遺跡等のうち、主な神社・顕彰碑等約百箇所を丹念に現地調査して纏め上げたユニークな内容の調査報告書である。その中には、邪馬台国の卑弥呼との年代比定や、当時の気候についての記述、

即ち、弥生時代の初め頃より上り始めた気温が、紀元前2〜1世紀をピークとして再び下降に転じ、その後古墳時代にかけて、現在よりも平均2〜3度も低い寒冷期に入ったことが分かっており、寒冷化や洪水の頻発という、農業生産に大きな打撃を与える環境変動が、弥生時代の中期と後期の間頃から生じ始めていたことが確かなようである。この危機を乗り切るために、様々な方策や戦略が執られたと推測され、乏しくなった物資や資源を争って近隣の抗争を引き起こしたり、洪水の土砂に埋もれてしまった耕地を捨てて新たな土地を目指したり、集団や所帯といった単位での変動が生じたことが推測される。特に西日本の広い範囲で地域社会の変動が生じたようである。神武東征の動機の一つに、この気候変動があったことは、十分に考えられることではあるが、邪馬台国の卑弥呼との年代比定とともに、今後総合的に研究・検討すべき課題であろう。これらのことに関し、記紀には何らの記述もないのである。

前記「神武戦史研究会」の代表である防大3期、慶應義塾大学卒の宮内瑞生氏の著書によると、遠賀川上流にある鮭神社は、神武天皇が祖父ヒコホホデミ、祖母トヨタマ姫と父ウガヤフキアエズを祀った神社である。遠賀川は、古来鮭の遡上する南限の川とされており、今でも若干の鮭が釣り上げられ、放流も毎年やっているとのことである。その本殿には、今でも献上された薫製あるいは塩漬けの鮭2匹が吊り下げられている、という。

神武東征の船団は、遠賀川において、遠征用の保存食とするため、鮭を大量に捕獲し、塩漬け又は薫製にして河口に集積し、船に積み込んだのではないかと考えられる、というのである。このことは、筆者にとつて新しい知見であった。「神武戦史研究会」チームの熱心な研究の成果であり、敬意を表したい。

従来筆者は、神武東征の船団がわざわざこの地に立ち寄ったのは、古代から皇室の信仰も篤い、宗像大社に航海の安全を祈願するとともに、強大な軍

船・軍備と航海術に優れた宗像一族、いわゆる宗像水軍を味方に付け、合わせて筑紫に勢力を張る邪馬台国連合に使者を派遣して、東征中、後顧の憂いがないよう何らかの工作をしたのではないかと考えていた。

当時遠賀川以西は、古代から宗像神郡と言われる宗像大社の神領であり、宗像大社は、北海道、つまり朝鮮半島との海上交通の安全・守護を祈願する国家的祭祀場とされ、天照大神の御神勅、即ち、「汝三神(いましみはしらかみ) 宜(よろ)しく道中(みちのなか)に降居(くだりま)して天孫(あめのみま)を助(たす)け奉(まつ)りて天孫(あめのみま)に祭(いつ)かれよ」との御神勅を奉じてこの地に降臨した宗像三女神と言われる三柱の女神、即ち、天照大神の御子、田心姫神(たごりひめのかみ)(沖津宮)、湍津姫神(たぎつひめのかみ)(中津宮)、市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)(辺津宮)を祀る。『古事記』及び『日本書記』によれば、この三女神は、天照大神と素盞鳴尊(すさのおのみこと)が高天原の天

安河を挟んで身の潔白を証明するために誓約(うけい)をされた時に、まず天照大神が素盞鳴尊の「十握剣(とつかのつるぎ)」を受け取り、噛み砕いて息を吹き掛けたところ、三柱の女神が生まれたが、その三柱の女神が宗像三女神なのである。次に素盞鳴尊が天照大神の「八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)」を噛み砕いて息を吹き掛けると、五柱の男神が生まれた。その五柱の男神は、天忍穗耳尊(あめのおしほのみこと)、天穗日命(あめのほひのみこと)、活津彦根命(いくつひこねのみこと)、熊野(くまの)櫛樟日命(くすひのみこと)であり、この中の第一神「天忍穗耳尊」は、後に高千穂峰に降臨された天孫「瓊(に)々(に)杵(ぎ)尊(みこと)」の御父で、神武天皇の御高祖であられる。

当時の神郡宗像の区域は、現在の宗像・福津両市に遠賀・鞍手・粕屋三郡の一部を合わせた広大なものであった。その長(郡司)である宗像(古くは胸形と表記した)氏は宗像大社の神主(平安時代以後は大宮司職(だいぐう

じしき)を兼帯し、かつ、筑紫から大陸に至る北海道中を支配する宗像水軍の長として、一大勢力を有していた。また、天武天皇とは、所縁が深く、血縁で結ばれている。天武天皇が大海人皇子(おおあまのおうじ)であった頃の第一の妃は、当時の胸形君德善(むなかたのきみとくぜん)の娘尼子娘(あまごのいらつめ)であり、天皇の第一皇子・高市(たけち)の皇子(みこ)を産んでいる。高市皇子は、壬申の乱の当時弱冠19歳であったが、大海人軍を統率して功を上げ、後に、太政大臣として、持統天皇を助けて政治を行った。万葉集にも作歌3首がある。

宗像大社の南、玄界灘に面した丘陵地帯の南北7キロ、東西2キロの範囲内に、宗像三女神の祭祀を司った宗像の君一族の首長の墓と見られる5〜7世紀の古墳群が集中して築かれており、津屋崎古墳群と総称されているが、現存する古墳は56基で、前方後円墳が16基、円墳39基、方墳1基で構成されている。その中で一族の繁栄を最も良く示しているのが、宮地嶽(みやじだけ)

古墳で、津屋崎古墳群の南端に位置する。そこには神功皇后を主祭神とする宮地嶽神社が鎮座しますが、その奥の院にある不動神社は、直径34mの円墳で、墳丘内部にある横穴式石室は全長23m、最大幅2・8m、天井までの高さ最大3・1mの巨大なもので、全国的に見ても最大規模のものであり、石材もまた巨大で、3×4m以上もある岩石を多く使用している。昭和9(1934)年と昭和26(1951)年の発掘調査で古墳の内外周辺から豪華な副葬品が多数発見された。金銅装頭椎大刀(こんどうそうかぶつちのたち)、金銅鞍金具(こんどうくらかなぐ)、金銅壺鍙(こんどうつぼあぶみ)等の馬具類、金銅透彫冠(こんどうすかしぼりかん)、蓋付銅椀(ふたつきどうわん)、銅盤(どうばん)、瑠璃(るり)板(いた)、瑠璃(るり)丸玉(まるだま)など30数点あり、すべて国宝に指定されている。また、昭和13(1938)年には古墳の近くで火葬墓が発見され、銅壺(どうつぼ)と瑠璃(るり)壺(つぼ)が出土し、同じく国宝に指定されている。現

在は、太宰府の九州国立博物館に收藏され、常設展示室の特別コーナーに、沖ノ島出土の古代祭祀神宝(約8万点すべてが国宝に指定されている)の一部と共に展示されている。

7世紀前半に造られたとされるこの古墳は、豪華な副葬品の存在などから天武天皇の第一皇子・高市皇子を産んだ尼子娘の父、胸形君德善の墓であるとされており、また、火葬墓から出土した瑠璃壺・銅壺は8世紀前半の骨壺であり、尼子娘のものとされている。以上のような観点から、筆者は従来前記のように考えていたのである。

神話を否定する民族は滅びる
評議員 飯田 正能

戦後の歴史学において、神武天皇を始めとする初期の諸天皇は、実在しなかったとする説が盛んである。その代表的なものが津田左右吉氏などの古代史観であり、それは「不合理な記述を含むものは信じられず、歴史を構成する資料としては、認めるべきではない」という立場に立っている。この考え方

を極端に押し進めると、不合理な記述を含む我が国最古の史書である『古事記』や『日本書紀』も、歴史を構成する資料ではなく、ましてやその中に含まれる神話なるものは壮大なホラ話であるということになる。日本の神話のみならず、ギリシャ神話や旧約聖書などもすべてホラ話ということになる。

しかし、その中には重大な史実の核があることを見逃してはならない。記紀に書かれた神話の世界、それに続く我が国の創生期の伝承は、そのまま実証できない部分はあるが、我々の先祖の精神を形成した伝承として、貴重な文献と言わなければならぬ。まして、その中に書かれている帝記（皇室の婚姻関係等系図的な記事）の所伝は、厳格に伝承されてきた古伝であつて、後世の七世紀あたりの造作だという主張は当たらない。

東大総長を務められた西洋史の林健太郎教授も「津田史学及びそれを受け継いだ今日の学者たちが、神武天皇の存在やそれ以後の代々の天皇の存在を否定することは、このような伝承の持

つ真実性に背を向けた態度であると言わねばならないであろう。神武天皇について記紀が記す個々の物語が事実でないことは言うまでもないが、『東征』という一つの民族移動が行われ、一人の優れた指導者の力によつて大和国家の基礎が築かれたという大きな歴史的事実は到底否定すべくもない」と述べておられる。

日本の建国神話に関して、近年、韓国や北朝鮮で、それは朝鮮半島に起源を持つものであるという説や主張が歴史家などの間で盛んになされており、日本の歴史教育にとつても憂慮すべき事態となつている。故名越二荒之助先生も、その遺著とも言える『史実が語る日本の魂』の中で「韓国に造成された高天原故地」と題する注目すべき記事を書いておられるが、その概要は次のようなものである。

日本と韓国・北朝鮮の建国神話にはある程度共通するところもあるようである。朝鮮半島には、古来「檀君（だんくん）神話」が伝えられている。檀君とは天帝（桓因（かんいん））の子（桓

雄（かんゆう））のことで、今から約5千年前（韓国では西暦紀元前2333年とされている）、「天符印三個」（日本で言えば「三種の神器」）を持ち、3千人の部下を率いて白頭山（中国と北朝鮮との国境を走る長白山脈の最高峰で、標高2744メートル。朝鮮民族発祥の聖地とされている）に天降つた（13世紀に僧一念がまとめた史書『三国遺事』による）とされ、北朝鮮では、この民族の聖地白頭山を革命の聖地ともしており、日本統治時代、金日成が抗日ゲリラの拠点とし、その山麓に秘密兵営を造つていたとして、8箇所はその営舎が再現され、金正日が生まれたという丸太小屋まで造られて、「聖地巡礼コース」に組み込まれている（金日成らの抗日ゲリラの拠点というのは架空のものであり、当時抗日ゲリラは満洲で戦う力を失い、昭和15年頃からソ連に亡命し、ハバロフスクの北方70キロにあるビアク村で、2万人規模の特別旅団を編成して訓練中であり、金日成はその一大隊長、階級はソ連軍の大尉であつた。また、金日

成の妻・金正淑は、1942年（昭和17年）2月16日に金正日を生んだが、難産で苦しみ、医者にもかからず、ワリアという老婆が取り上げたと言われている。しかし、ワリアは獣医として働いたことはあったが、産婆の免状は持っていなかったということである。更に、北朝鮮では現在、平壤郊外に壮大な「檀君陵」を建造しているが、1993年（平成5年）に檀君夫妻の骨が発見されたということで、電子磁性共鳴法による年代測定の結果、5011年前の骨と判明し、金日成の指示により、遺骨を納める陵が創建され、翌年除幕式が行われた。15万坪に及ぶ広大なもので、除幕式には、南の韓国の、檀君教の信徒達も多数参加したということである。そもそも檀君を始祖とする信仰は、南の韓国の方が根強いとも言える。韓国の教育基本法が記す教育の目的は、「弘益(こうえき)人間」の養成である。「弘ク人間ヲ益スル」というのが、檀君の遺訓であり、建国の理想なのである。韓国では10月3日がいわゆる「建国記念の日」であり、

「開天節」と称して「四大節」の一つに定めている。韓国各地に檀君を祀る「聖殿」があり、その数は70箇所に及ぶという。

かように、檀君紀元は、西暦よりも2333年古く、今年（平成29年）が4350年ということになる。彼らは半万年の歴史を誇り、神武紀元の倍の古さだと自慢する。しかし『古事記』が書かれたのは712年、『日本書紀』が書かれたのは720年である。それに対して、韓国の『三国遺事』は500年後の13世紀初頭に纏められた。『三国遺事』には、3千人の部下を率い、「天符印三個」を持って白頭山に天降ったことになっているが、その三個とは何と何であり、今どこにあるのか、一切不明である。それに対して、記紀の記述は詳細であり、天孫邇邇藝命(ににぎのみこと)（天津(あまつ)彦火瓊瓊杵尊(ひこほのににぎのみこと)）は三種の神器（鏡と玉と剣）を持って高天原から高千穂の峯に天降った。この三種の神器は、天皇の地位を現すしるしとなり、鏡は伊勢神宮（内宮）の

御神体、剣は熱田神宮の御神体として、玉は宮中賢所にそれぞれ奉斎され、今も信仰の対象となっている。一方、彼の檀君王朝は、47代、1500年で断絶した事になっている（これも実証性・記録性に乏しい）が、日本の天皇朝は、高天原の天照大神から受け継がれた血統と三種の神器が、現在にまで続いている。これは世界における唯一、例のない国と評価されている。

ところが、終戦の翌21年3月、GHQの要請で来日したアメリカの教育使節団が、日本の教育内容を調べて「客観的歴史と神話を分離させること、神話は外国の神話と共に文学として保存すること」を指導したため、以来、日本は自国の建国神話を教えず、それに代わるものとして、中国の古代史である『魏(ぎ)志(し)倭人伝(わじんでん)』の邪馬台国(やまたいこく)・卑弥呼(ひみこ)を教え、考古学の研究成果ばかりが強調されるようになり、記紀に書かれた神話を教えないものだから、高天原も天孫降臨も高千穂の峯も知らず、天照大神や神武天皇のような国家

形成の主役となった伝承も知らない人が多くなってしまった。

神話は、その国、その民族のアイデンティティである。精神的支柱であり、愛国心の根源である。自国の国家形成の歴史も知らず、神話を否定する民族は滅びる、と言われる。だから韓国でも、北朝鮮でも、中国でも、神話を取り込んで歴史教育の中心に据えている。更に韓国では、驚くべきことに、平成11年1月、韓国慶尚北道高霊邑に、広さ5万坪の「高天原故地」が造成された。多くの韓国人は常に日本人の優位に立ちたいという意識を持っているようだ、日本人の国民意識から高天原が失せてしまった間隙を縫うように、韓国は高天原を造成してしまった。その造成の指導者加耶(かや)大学校長・李慶熙博士(経済学)は、記紀の都合のよい所をつなぎ合わせて高天原は高霊邑にあったと主張してやまない。現地には、「高天原居住神之系譜」という碑が建っている。その碑によれば、高天原に住んでいた神々は、すべて韓国人である。その中から日本に天降つ

た神々は、よく分かるように、枠で囲んでいる。更に注目させられるのは、李総長作の「高天原」と題する巨大な詩碑が造られており、ハンブルと日本文が刻まれ、「われわれの祖先は、遠くアルタイの地からこの地に移り住み、加耶の国々を創建し、さらに海を渡って今日の日本を築いた」という趣旨のものである。資料的裏付けなしに韓国人はこのように主張し、歴史を捏造してしまうのである。確かに、記紀の時代には、日韓の交流はかなりあった。例えば、「任那」の語は、合計百箇所も出てくる。ところが、日本の記紀や風土記にも、そして、韓国の『三国史記』、更に、国ごとにまとめられた高句麗、百濟、新羅、駕洛等の神話を調べても、高天原が朝鮮半島の一角にあつたとも、そしてそこから日本に天降つて日本を造つたとも、書かれていない。そういう発想は珍奇で、韓国人にとつては面白い話であるが、文献的裏付けが皆無では、説得力はないのである。

世田谷山観音寺
特攻平和観音月例法要報告
(毎月18日14時より境内特攻観音堂に於いて、参加自由)

今年最初の月例参拝は、寒風は吹いていたが、日差しの温もりを感じる穏やかな日であった。参列者は11名で、いつもの様に特攻平和観音堂での法要が行われた。御供物は新年ということ、太田賢照山主様から丸餅を頂戴した。

代官屋敷に場を移動しての直会参加者は八名。水町理事の発声で献杯を行い、新年という事で大和尚様のご挨拶があつた。毎回、初参加・久しぶりに参加された方の一言を頂くが、今回は茨城県から遙々来られた北澤修氏のお話を伺った。北澤氏は建築業を営みながら、仕事を通じて知り合った施工主や、身近な人達の特攻隊の話をしたり、

平成29年1月18日(水) 月例法要

評議員 倉形 桃代

知覧に案内して研修を積極的に催されてきているという。2003年に、鳥濱とめさんの娘である赤羽礼子さん、特攻隊の生き残りで語り部をされていた板津忠正氏と知り合い、話を聞く中で感銘を受け、自分も英霊の偉業を広く伝えて行きたいと思い、そのような活動を続けているそうだ。英霊に恥ずかしくない生き方、仕事をしたと思っ
ているとの力強いお言葉を、とても頼もしく思った。恒例の望月氏による戦時歌謡の解説の中で昭和13年に発売された「母子船頭唄」（作詞／佐藤惣之助・作曲／細川潤一・唄／塩まさる）の紹介をされた時、今回の参加者で唯一軍歴をお持ちの呉正男氏から「私、その歌を歌えます」との発言があり、歌詞を思い出しながら朗々と歌われた。歌詞の中に“月が鏡なら、遠い戦地の父さんを映してくれ”という歌詞があり、今も心に残っているのだそうだ。哀愁を帯びた歌声、戦地の父を想う家族の切なさに、一同想いを馳せたひと時であった。

台湾出身の呉氏は、昭和19年に陸軍

特別幹部候補生を志願され、水戸航空通信学校を出て、西筑波の滑空飛行第一戦隊で、グライダーを曳行する97式重爆撃機の通信士を務められた。先程の歌の余韻もあつてか「嗚呼神風特別攻撃隊（作詞／野村俊夫・作曲／古関祐而）」という歌がありまして、私は3番まで覚えています。よく軍歌をお酒の席で歌いますが、私は歌いません。今日は直会の席なので歌います」と仰つた後、低い静かな声で歌いだされた。私はこの歌を知っていたが、歌詞はつきり記憶していなかった。特にと仰られた三番の歌詞は

送るも征くも今生の
別れと知れど微笑みて
爆音高く基地を蹴る
あゝ神鷲の肉弾行

この歌詞を聴きながら、特攻隊を見送る場面を思い描いた。共に過ごした戦友との“今生の別れ”戦後生まれの我々にその体験はないが、当時その場所
所にいらした呉氏の歌声は深く哀しく、

見送ったであろう戦友への哀惜の念が切々と伝わって来た。私はレクイエムのようなと感じた。

太田恵淳和尚からは、最近観た「この世界の片隅に」という映画のお話があった。絵を描くことが得意な主人公が広島
の呉に嫁いでの日常を描いたアニメーション映画で、昭和20年8月6日、広島に原爆が落とされる場面や、主人公が絵筆を持つ手を失つてからの話もあつたが、戦争への批判や悲劇を特に前面に出していないストーリーで、何気ない日常が壊される怖さを、逆にリアルに感じた
と感想を仰つた。

境内には2月3日に行われる節分会の豆まきの舞台が組まれていた。今は枝ばかりの桜の木が満開になり、英霊が帰って来る春は少しずつ近づいている。

平成29年2月18日（土）月例法要
会員 金子 敬志

当日の参列者は11名であった。法要は定刻の14時から恵順和尚の読経により開始された。懺悔文、開経偈、魔訶

般若波羅蜜多心經と続き、最後に特攻平和觀音經を讀経して終わった。

法要終了後、参列者は世田谷山觀音寺本坊の代官屋敷に移動し直会が行われた。

直会の始めは初参列者の自己紹介から開始されるのが例であるが、今回は4名の方の自己紹介があつた。

始めは当頭彰会の評議員でもある片山幸太郎氏が自己紹介をした。片山氏は齒科医師で、元陸上自衛隊の医官との事である。補足すると、医官ではあるが、陸上自衛隊の最精鋭と言われる空挺レンジャーの資格と共に、教官資格も取得した異色の経歴を持つ方である。

続いて村田陽氏、佐倉亜希子さん、瀬尾恭裕氏が自己紹介をされた。自己紹介の後、村田氏が特攻觀音像の由来について質問をされたが、それについては太田賢照山主が詳しくお話をされた。

特攻觀音像は昭和25年音羽護国寺における開眼供養を行い安置されたが、役員の不手際により供養料を収める事

が出来なくなり、安置出来なくなつてしまつた。そのため、海軍特攻像を及川古志郎海軍大将、陸軍特攻像を河辺正三陸軍大将が自宅にお預かりする事になつた。その後、お二方から先代の睦賢和尚に奉安のお願いあつた。当初、先代は「国のために亡くなられた特攻隊員をお祀りするには申し訳ない。」とお断りしたが、両氏より「ここで断

られたら私どもは切腹ものです。」と懇願されたのでお引き受けする事になつた。知覧にも特攻觀音像があるが、あれは当初の2体の後に、陸軍特攻の地知覧にも安置したいと言う事で奉安されたものである。「なぜ、知覧は1体なのに世田谷には2体あるのだ。」と言う方がおられるが、このように世田谷が先であつて、知覧にお分けしたものである。

その他。池中にある夢違觀音の拡大模写についての法隆寺からの許可、觀音堂内の菊の紋章使用の許可、敗戦の一因と言われた海軍と陸軍の軋轢が戦後の慰霊頭彰活動の中にもあつた事など、いずれも生き字引と言える大和尚

ならではの興味深いお話を頂いた。賢照大和尚のお話は尽きなかったが、時刻になつたのを一区切りとして直会は終了となつた。

平成29年3月18日(土) 月例法要

評議員 片山 幸太郎

平成29年3月18日(土)の月例法要当日は朝から快晴でしたので、清々しい気分です。世田谷觀音寺に向かいました。

新玉川線の三軒茶屋駅を下車してゆつくりと徒歩20分弱でお寺に到着します。が、経路の途中には日本大学三軒茶屋キャンパスがあります。その昔、農獣医学部がその地にありましたが、神奈川県に移転し、現在は日本大学の16コの学部の中で一番新しい学部として危機管理学部とスポーツ科学部が昨年春に開設(昨年春)されて、真新しい瀟洒な学舎が道路の左右に建っています。

写真1は、世田谷山觀音寺境内にある多羅葉樹(はがきの起源)の写真です。他にも色々勉強になる文化財が境内に多数あり興味が尽きることはあ

世田谷山観音寺・特攻観音像(左側海軍、右側陸軍)



写真2

世田谷山観音寺境内にある多羅葉樹(はがきの起源)



写真1

りません。

写真2左は、世田谷山観音寺の入口に設置してある世田谷区教育委員会の立て看板です。区の名所であることを示しています。写真2右は境内の特攻観音堂内の特攻観音像(左側海軍、右側陸軍)です。左右の特攻観音像の後ろ上部中央に菊の御紋が輝いており、国の守りに就いて共に貢献をした陸海軍が相和し、菊の御紋が全ての特攻戦没者各位に対する国民の慰霊顕彰の祈りを万遍なく導いているように筆者は強く感じました。

午後2時からの月例法要は、17名の参会者と賢照山主・恵淳和尚の計19名によって執り行われました。その後の直会の開会にあたり、山主の太田賢照和尚(今年2月3日に92歳になられた由)から献杯の意味についてのお話がありました。すなわち献杯は故人や御英霊に捧げるものなので、献杯の発声の音頭を執られた方は杯に口を付けずに上に挙げた後に祭壇に置き、すかさず司会の方などが別の杯を持って来て、音頭を執られた方に渡して下さるとい

う流れが正統とのことでした。直会は、山主・和尚に15名の参会者を加えて17名で、初めての参会や久々の参会である4名の方々から御挨拶がなされました。そのお一人の原 由佳様は台湾国籍の呉 正男会員の御紹介で帯同されてお参りに来られました。お知り合いになった切っ掛けは、呉 正男会員出演の台湾アイデンティティーというDVD(かつて日本人だった台湾の方々)が語るそれぞれの人生を観てファンになったからとの由でした。4名各人の自己紹介の後、廣嶋会員からの教育勅語についてのお話しや、望月会員からの戦時歌謡のお話し、さらに大穂孝子顧問からの父・小澤提督の思い出のお話しなどが順次なされました。特に、父子で御参会されていた北村会員からの御発言による「逆・教育勅語」のお話しが非常に印象的でしたので本稿で少し紹介をさせて頂きます。インターネット上では結構知られている様ですが、憲政史研究者の倉山 満氏による「逆にしたらよくわかる教育勅語」は「教育勅語を逆方向にして実践すると

道徳もモラルも無い現代日本の世相の様になる」との論説です。すなわち

「一、親に孝養をつくしてはいけません。家庭内暴力をどんどんしましょう。」

「五、自分の言動を慎んではいけません。嘘でも何でも言った者勝ちです。」

「八、知識を養い才能を伸ばしてはいけません。大事なものはゆとりです。」

などはその一部ですが、十二項に亘り解説をした上で、今こそ教育勅語を貶めた勢力の誤りを喝破し、荒廃した日本の教育を立て直さないとならないと

述べています。「今の日本がダメなのは教育勅語がないからだ！」の副題とともに、書名「逆にしたらよくわかる教育勅語」はハート出版から単行本で出ています。

以上が3月18日の月例法要の様子で、直会は午後4時頃に散会となりました。

会員投稿

会員の佐藤花様が福岡県朝倉郡筑前町主催の「平和のメッセージコンテスト」に応募して優秀賞を取られた論文です。本会からご本人と著作権保有の筑前町にお願いして許可を頂きましたので掲載させていただきます。

第4回 平和のメッセージコンテスト

トピちくぜん

優秀賞

2016年2月20日

「笑顔の祖母から笑顔を継ぐ」

立命館慶祥高等学校2年 佐藤 花

「おばあちゃんね、昔もらわれた事があるんだよ。」突然の言葉に私は祖母が何を言っているのかわかりませんでした。昭和19年、末っ子だった小学校3年生の祖母は、突然地元の裕福な家に養子に出されたのです。戦争で生活が苦しい中、病気で父を亡くし女手一つで多くの兄弟を育てる事が難しかつ

た為の苦渋の決断でした。

あまりの賤の厳しさに家に逃げ帰った祖母は、お母さんに抱きしめられ何度か「ごめんね。ごめんね。」と謝られたそうです。優しく話す祖母の目には涙が薄らと浮かんでいました。私は祖母に何と言葉をかければ良いのかわからず、只々頷くだけでした。

テレビを見ていると目に飛び込んできた衝撃的な映像。それは痩せた沢山の子どもたちがまるで獣のように檻の中に入れられている写真でした。小中学生くらいの子どもたちが無表情で写っている光景。『戦災孤児』聞き慣れないこの言葉が、私の頭から離れませんでした。当時、13万人以上いたと言われる戦災孤児。彼らはどんな想いで生きていたのか？どんな想いで今日を生きているのか？私は直接お話をうかがいたいと思います、今年の8月、東京大空襲・戦災資料センターを訪れました。「初めまして、私が戦災孤児の吉田です。」そう話しかけてくれたのは笑顔が素敵な女性、吉田由美子さんでした。

東京は昭和19年11月14日以降、100回以上の空襲を受けました。中でも、昭和20年3月10日の空襲は『東京大空襲』とも呼ばれ、死者10万人以上を出した無差別爆撃でした。その空襲は多くの人たちの人生を変えました。吉田さんもその一人でした。

その日、吉田さんの家では、空襲の酷くなる東京から父の実家がある新潟へ疎開する準備を丁度しているとありました。3歳だった吉田さんは荷造りの邪魔になるため、一晩だけ近くの知り合いの家に預けられました。それが運命の分かれ道となってしまうのです。一人残された吉田さんは、母方の親戚の家を転々とし、最終的に父方の姉夫婦の家に引き取られ暮らす事となりました。

「お前も親と一緒に死んでくれれば、お前のような子を育てなくて済んだんだよ。」

それが伯母の初めての言葉でした。まだ6歳の吉田さんには余りにも心無い言葉。この言葉で両親が死んだ事を初めて知ったのです。それまで両親はど

こかで生きていて迎えに来てくれると思いついていた吉田さんは、大きなショックを受けました。しかし、それは12年間続く地獄の始まりに過ぎなかつたのです。

初めての学芸会。ダンスを踊る主役の一人に選ばれ久しぶりに嬉しい気持ちになれた吉田さん。伯母さんもきつと褒めてくれるだろうと急いで帰ると「頑張らないで良いって言つたらよ！」という言葉。「ドレスを作るためのお金をお前にはかけたくないんだよ！」と怒鳴られたのです。

3年生の時には、クレヨンで描いた絵がいつも薄く弱々しい事を心配した先生が家庭訪問にきました。先生の帰宅後、伯母と従姉が吉田さんの頭を叩いたり頬を平手打ちしたりして「お前は先生に何を言い付けている。全部言ってみろ。」と問い質しました。何も言っていないと言つても信じてもらえず、更に頬をつねられ、遂には角材で頭を叩きつけたのです。そんな仕打ちを受

け続け、吉田さんは次第に笑顔を失っていきました。

今でも3月10日になるとあの辛い日々を思い出すと言います。「悲しくて、苦しくて『お父さん、お母さん』と叫んでも顔が思い浮かばない。声も思いつけない。その苦しさはとても言葉では言い表せない。」吉田さんの言葉が胸に刺さりました。

戦争によつて苦しめられた吉田さんの過去を知った私。祖母も似た様な思いをしたのかもしれないと思うと彼女たちは、どうしてこんなに苦しい思いをしなくてはいけないのか？と胸が痛みました。過去は変える事は出来ません。『戦争』という悲惨な出来事によつて今もお苦しんでいる人たちがいる。その事を私たちはどれ位実感できているでしょうか。もしも戦争の無い平和な世の中であれば、あんなにも多くの子どもたちが不幸な境遇に追い込まれる事は無かつたはず。私の祖母は戦災孤児ではありません。幸

運にも帰る家がありました。しかし、あの戦争によって心を傷付けられた一人である事には違いありません。

あの惨劇を二度と繰り返さないためには、多くの人たちが体験した不幸な出来事を決して忘れてはいけません。私たち若者は伝えていかななくてはいいのです。私は、これまで聴いてきた数々の体験談を伝え続けます。いつの日までも忘れる事のない様に。

祖母の家に行くと、「よくきたね。ゆつくりして行ってね。」優しく、温かい手で頭を撫で、いつも笑顔で迎えてくれる。私はそんな祖母が大好きです。

機付長の記憶
特攻機を中心とした原町特攻隊史

大槻 健二

たつぎ

本稿では銚田教導飛行師団の人員をもつて編成され第一飛行師団付を経て第六航空軍に属し、昭和二十年六月十一日万世飛行場から出撃した第六十四振武隊「国華隊」の「と」号機（特攻機）を軸に、機材の受領から改修、出撃までを追っていく。この隊は福島県原町飛行場で特攻訓練を二ヶ月実施した二隊の内の一隊である。もう一隊についても一部触れている。以下の記録は回答者の記憶違いや、又聞き、筆者の先入観による間違いがあると思う。「現段階で判明した事項」である事をお赦し願ひ、正確を期して今後も修正・加筆を行っていく点をお断りさせて頂く。

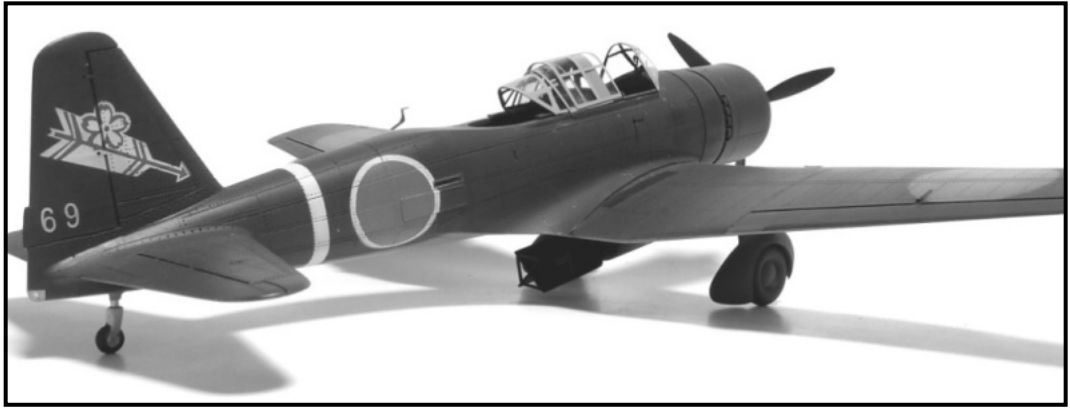
国華隊編成表（階級は出撃当時）

- 隊長 大尉 渋谷健一
- 小隊長 少尉 巽 精造
- 小隊長 少尉 稲垣忠男
- 操縦手 軍曹 橘 保（帰還後に曹

- 同 長 井上 清
- 同 軍曹 齊藤正敏
- 同 軍曹 稲島竹三
- 同 軍曹 横田彦次郎
- 同 軍曹 加藤俊二
- 同 伍長 鈴木文治（帰還後に軍曹）
- 同 伍長 岸田盛夫



国華隊の十二人



第六十四振武隊 国華隊機 (模型作品)
キ五一「と」号機 (軍偵改修型)



近藤諭氏

整備軍属 近藤氏の証言

元・整備軍属近藤諭、昭和三年九月、福島県相馬郡高平村（現 南相馬市原町区）生まれ。少年飛行兵を志すが「死を急ぐな」と父から諭され断念し、十四歳で原町飛行場周辺地域採用の整備軍属（雇員とも呼ばれた）の十六人のうちの一人として、原町で約一週間、鉾田で約一か月、九九式襲撃機と二式複座戦闘機の整備教育を受けたのち、原町に戻って原町分教場所属の九九式襲撃機の機付長となる。比島での八紘・鉄心隊編成にあたって整備員として同行するという内命を受けるも発表日に盲腸で入院、人員から外された。昭和二十年四月、原町で特攻編成にあたり第六十四振武隊の小隊長・巽精造少尉

の機付長として万世まで前進、終戦を迎えた人物である。数年前、関係者の紹介で知り合う機会が出来、様々な事を御教示頂いた。



若き日の近藤氏、初同乗の日
に航空服を借りての一枚

機体受領と改修く国華隊

この隊は、キ・五一（「きのごーい」と読む）「と」号機が十二機、操縦者十二名で構成されている。二人乗りだが、特攻では一人乗りとして運用された。予備機は無かったという。機体受領のため高等双発練習機で整備員と輸送任務の操縦員が各地の航空廠に向かった。富山で四機、各務ヶ原で六機、立川で二機の順で受領した。近藤氏はこれに全て参加している。受領後は機体改修及び訓練の為の調整を実施した。順不動となるうが、以

下に改修の項目を記す。なお、無線機や武装に関しては専門技術を学んだ整備員が処置するため、全てを現場の整備員が実施した訳ではない。

※近藤氏を始めとする後に機付・機付長となる者達は、特攻編成前にあつては、原町飛行隊整備中隊の一員という立場にあり、特攻機とは認知しておらず指示通り作業を実施していた。

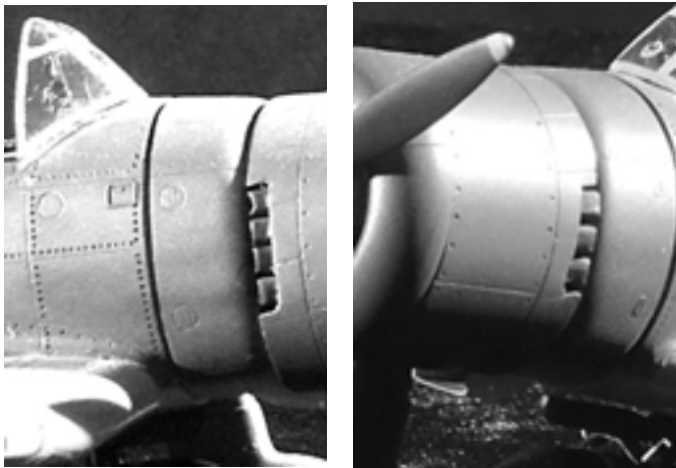


目達原飛行場での井上軍曹

一 排気管

排気管から発する火炎の分散による薄暮攻撃時の発見防止と速度向上を企図した改修として、従来の集合排気管から単排気管への改修を実施した。原町の整備工場には改修用のキットが木箱に入ったままの新品で在庫しており、

整備員たちの手で比較的容易に装着された。可動式のカウルフラップは各機付が金切りハサミで切って排気管と干渉しないように整形した。瑞星発動機の気筒数は計十四であるが、何本かの気筒を合わせて、機体の右側に四本、左側に三本の排気管が出ていたとの記憶があるという。



証言を元に製作した模型作品 (排気管)

※単排気管採用に至る経緯は渡辺洋二著の「空の技術」所収『軍偵と排気管』

参照。中国戦線での整備員達の創意工夫が単排気管採用に繋がったものである。



集合排気管の機体 (比較用)

二、胴体内タンクの撤去

操縦席後方には予備の燃料タンクが搭載されており、長距離飛行に使用されたというが、使用した経験はなかったという。特攻には必要なく撤去された。

※「丸メカニック」によると、胴体内タンクは航続距離を補うために実戦部隊が勝手に増設した旨の記載がある。

また、機体下面の防弾板は撤去せず、軍偵型の特徴である地上偵察の為の下面の偵察窓はそのままにしていた。側面にも偵察窓があったが、写真で確認する限り閉塞したと見られる。

三、無線機、武装等

操縦席後方に設置されている「飛二号無線機」は戦果確認用であるため、隊長、小隊長機の計三機を除き撤去した。撤去された機体は前部風防にある空中線用の支柱も切断されている。電鍵は操縦席まで延線した。武装については後部座席の機銃（銃架含む）及び翼内機銃は撤去となり、翼内銃用の孔には金属板で出来た付属品の覆いがビスで取り付けられた。

風防を貫通する形で取り付けられている望遠鏡型の射撃照準器は撤去され、取扱説明書にその図が確認できるが、付属品の円形セルロイド板二枚で風防を挟み込んでビス止めし孔を閉塞するようにになっている。爆撃用の環形照準器も撤去されたはず、という。

また、軍偵型に装備されている、胴体下面に固定された航空写真機も撤去、後部座席の計器（高度計と速度計）も撤去されている。不思議ではあるが訓練でも一度も使用せず吸入マスクも携行しなかったのに、酸素ボンベは出撃まで付けたままだったという。取扱説

明書によれば酸素ボンベは軍偵型のみとあり、隊の編成後に担当する機は軍偵改修型との事であるので、この記憶は確かに辻褄が合う。

四、爆弾懸架装置の取付

この改修は爆装班担当のため、細部の記憶は無いが、原町で改修を行ったという。懸架装置は、フィリピンでの八紘隊の映像、八紘石腸隊、八紘進襲隊、六十二、六十三、六十四振武隊の写真（これらの隊は全てキ・五一で編成）と、太刀洗平和記念館収蔵の九七

式戦闘機に装備した実物の懸架装置を確認すると、ほぼ同型であるとみられる。これらは全て棒状で「へ」の字型「振れ止め」が前後に付いている。

「と号用爆弾及と号機爆装ノ栞 其ノ三」によると「五〇〇胚架」であり、これを装備したキ・五一と号機において対応する爆弾を「五〇〇胚」「二五〇胚」（陸軍用）「二五番通」（海軍九九式二五番通常爆弾一型）「四〇〇胚破甲」（四式四〇〇胚破甲爆弾）と記してある。但し、投下する為の機構である「電磁器」の種類が爆弾の重量によって異なっている。（二五〇キロ用は陸海軍兼用である）

五、塗装について

先述した富山で受領した四機は新造機であったという。機体からプロペラまで塗装なしの銀色無地であり、日章（日の丸）と主翼前縁の味方識別帯（黄橙色）だけ塗られていた。原町の格納庫で塗装されたと思うがこの四機は上面が緑色（正式には黄緑七号、自衛隊のOD色に近い）のベタ塗り、下面は灰色に塗装されたという。原町飛



八紘隊の爆弾の取り付け状況
映画「陸軍特別攻撃隊」より

行場ではエアークンプレッサー式塗装器材を所有しており刷毛ではなくスプレーによる塗装が可能だったという。ベタ塗り機のほか、斑(まだら)迷彩が施された機体があった。これは他部隊からの転用品との事である。写真で確認すると、脚のカバーも機体と同じようにそれぞれベタ塗りないし斑に塗装されている。



隊長機と言われる機体の尾翼
ベタ塗りと言えど濃淡が目立つ

風防ガラスの枠は、灰色と緑色の二種類が写真より確認出来る。

近藤氏の記憶では、渋谷機はベタ塗り、異機は斑迷彩という。「遠目には綺麗に見えるかもしれないが、近くで

見ると汚い塗装だった」ということであつた。機体も新品・転用品が混在していたのであるが、平均して新しいものであつたという。給油口のマーキングは特に施さず機体と同じ色であつたという。

機体の国籍を標示する日章については、主翼上下面は白縁なし、胴体については白縁が付く。胴体「日の丸」の後方には全機白線が付く。これについては関係規則が確認できなかつたが「戦地標識」等と称されているようである。教育用ではなく、実戦用機材を示すものと言われる。

以上、一部は時系列が異なるものの、主として編成準備段階の改修事項について記した。

※第六十三振武隊・神州の機体

この隊は国華隊の少し前に同地において編成されている隊である。残念ながら隊の情報は乏しいが、機体の話はいくつがあるのか併せて掲載する。

○ここでは「あかねぐも」神州隊長久

木田清大尉(当時中尉) 手記より引用する。



神州隊の機体。爆弾懸吊架が見える。胴体の窓から軍偵察機ベースの機体であることが分かる。

(機体受領について)

まず飛行機受領です、立川で3機、4機と日を別にして受領しては原ノ町に持ち帰りました。(中略)生産も著しく低下し全機一度に揃えることは困難でした。飛行機の大きな特徴は木製プロペラを使用していました。資材面も極度に逼迫していたのでしよう。

とある。ここでのプロペラの話は、近藤氏は「可変ピッチ式であるので全部金属製の筈、見たことが無い」と反論

しているが。今後の資料の発見が待たれる。

手記は続く。

(燃料について)

この頃訓練用の燃料はアルコール燃料を使っていました、実際に飛行して見るとアルコール燃料と木製プロペラだとも頼りなく急降下して加速がつくと機の保安上自身が持てないのでプロペラは在来機の金属製プロペラと交換し燃料は虎の子のガソリンを使用してもらおうにしました。このような意見申はスムーズに通りました。

この隊は、訓練開始当初からガソリンを使用していた事が分かる。国華隊は後述するが原町を出陣する際に燃料を変更したらしい。

(武装・無線機・排気管について)

九九襲は両翼に一挺ずつの7ミリ機関銃を装備していましたが、特攻機には不要なもの、他に使ってもらおうと全機取り外しました。(中略)無線機は中隊長機と小隊長機に装備していましたが、緊急時と突入時の合図をきめて使用することで(中略)使用機の九九

襲は当初設計の集合排気管から単排気管に改造されているので、消焰効果がより改造前に比べると殆ど焰が出ないようになっている(引用終わり)

この点は国華隊と同じ処置要領であった事が分かる。

続いて、高橋圭子会員編集の冊子「花吹雪 第六号」に収録されている、尾翼マークを考案・教え子と共に描いた図画教員・藤田魁氏の手記より引用する。

機中には操縦席以外、邪魔物は全部取り払われていた。少しでも機体を軽くせんとの計画からだつたらう。私共は機内でじかに尻をつき腰をかがめて乗っていた。(引用終わり)

この描写は原町出陣間近で、マークのお礼として藤田氏以下の生徒を同乗させ飛行した時の描写である。神州隊も国華隊同様、機付たちが万世まで前進しているが、撤去時期(後述)に違いがあることが分かる。

神州隊機体についての判明分は上記に過ぎない。陸軍の特攻隊は機体の改修も訓練計画も隊長任せという面が多

大にあったようで、若い隊長(神州隊の場合半数以上が隊長より年齢も経験年数も長い)には精神的負担が大きかったことは想像に難くない。

国華隊編成

話を国華隊に戻す。四月一日編成下令、四日、操縦者と整備小隊が初めて顔合わせをした。近藤氏の担当は異精造少尉機。機付の中には下士官もいるのに将校の機体に軍属が当てがわれた事が不思議でならないと言う。

原町では一機あたり機付長及び機付二名が配置され、機付を指揮する整備小隊長は学徒出身の力丸見習士官(途中で少尉に任官)で経験乏しく、隊長機を担当したが出撃に至るまでこれも近藤氏に任せつきりであった。整備小隊に対する技術的指導は、原町飛行隊整備中隊長・田辺大尉があたった。整備技術に精通しており、機の割当、機付の配置も田辺氏を始めとした飛行場整備隊基幹要員の差配によるといえる。整備隊は整備隊の兵・軍属で、機付長を補佐するが、特に試運転の際にエン

ジンを全回転まで上げる際に浮き上がろうとする尾翼を押さえたり、車輪止めを外す都合で二名必要だったという。

先の通り、近藤氏は実質二機を出撃まで担当することになった訳で、整備作業は夜遅くまでかかり、夕食も冷めたものを口にする事が多かった。ただし機付も同乗飛行の際は空中勤務者としての扱いを受け、薄暮・払曉演習時に兵舎内に宿泊する際の給養は良く、毎食白米で夕食には菓子（航空糧食）

や航空元氣酒・航空葡萄酒に軍用煙草「誉」が支給された。当時十七歳、酒や煙草を覚えたのもこの頃であった。

※軍属は基本的に営外居住で、飛行場から貸与された自転車で通勤していた。

訓練にあたり、燃料はアルコール燃料（混合比不明）を、潤滑油はひまし油を使用した。潤滑油の種類については、注入口付近に黄色ペンキで記入したという。潤滑油系統の注記は黄色、燃料系統の場合は赤色注記との事である。

アルコール燃料使用にあたっては気化器の噴霧濃度をガソリンより高めに



油種標記の一例 映画「乙女のいる基地」より。標記の右が注油口である。文字はもっと小さかったとの事

設定した。

潤滑油のひまし油は植物性のため粘度が高く、排気管から出てくる油のべたつきは、布で拭いただけでは中々取れず、飛行訓練後に水抜きのためタンクから抜き取ったガソリンと、作動油を混ぜたものをウエス（布）にひたして拭くと綺麗になったという。そのため、排気管周りの塗装はすぐに剥離してしまっただが、塗装の補修を行った記憶は出撃まで無い。原町を始めた各地で女学生が機体の清拭等の奉仕にあたっていたという。

整備上苦勞した点について質問した

ところ、特筆する程の難点は無く、割に整備が楽だったとの事ある。また、使用時間によって定期交換が必要な消耗品については円滑に補給を受けていたという。

なお、機体左側面、足掛けの上に白色筆書きのA4サイズほどの枠内に操縦者の姓名階級・機付長姓名階級（または「軍属」と表示がされていた。

操縦者	翼精造少尉
機付長	近藤論軍属

機体の標記（例）
証言を元に図にしたもの

原町での飛行演習は離着陸訓練、宮城県の松島方面で小島を敵艦船に見立てた突入訓練、射爆場での急降下爆撃訓練、夜間・薄暮・払曉飛行等がある。突入訓練では低空性能の良さを活かして、海面すれすれに目標に接近、敵の

直前で浮き上がった突入する戦法を主に演練していた。原町での訓練期は左翼上面に「ルバロア式射撃鑑査写真機」が設置されており、突入訓練や爆撃訓練の際、衝突直前で操縦桿に装着したレバーでシャッターを切り、撮影して命中度の判定に活用された。飛行経験が長く技術優秀な渋谷隊長は隊員の教官も兼ねており、写真班で現像した写真を元に指導が行われていたと思われる。毎回ではないが近藤氏は何度も後部座席に同乗したまま訓練に参加しており、「編隊で超低空飛行をすると、前方からの水しぶきで前が見えなくなる。ワイパーが欲しい位だった」と回想している。

操縦者との連絡手段は伝声管を用いた。航空帽を着用していないため、翼少尉が手で合図をするのを見て、伝声管に耳に当て会話をしたという。

編成後すぐに着陸事故が発生。稲島竹三伍長である。時期については齋藤伍長宛ての葉書三通の他に手掛りが見つからなかったが、四月六日以降、五月十二日を過ぎる期間は仙台の陸軍病院

に入院していた事は間違いない。破損状況等は細部不明だが、後方整備における修理又は代替機の受領が行われたと推測される。

飛行機は空襲を避けるため飛行場の端に掩体壕（爆風回避のため盛土で囲まれている場所）があり、そこに一機ごと入れていた。それぞれの壕の間隔は十から二十メートル、大きな声で会話出来る程度の距離だったという。駐機時はエンジンに付属の覆いをかけ、偽装網を竹などを支柱にして展張、その中に駐機し、日常の点検・整備はここで実施した。格納庫内で整備することもあったという。

五月二十五日十二時、前線基地への前進命令が下達、後方整備により格納庫でエンジンは分解整備され、気化器をガソリン燃料用の調整にし、潤滑油もひまし油を抜いて鉱油に戻すなど出陣前の整備を実施。この際先述の鑑査写真機も撤去された。二十六日、仕上がった全機を飛行場整備中隊長田辺大尉・細川曹長・沖軍曹ら、熟練整備員によって一機一機点検された。機を一

列に並べ、近藤氏を含め、各機付長が搭乗・待機し、機体の前に立った田辺大尉の指示でエンジンを始動し、補佐役の下士官と共に点検したのである。

※潤滑油の交換は原町以降実施せず、減った分をその都度追加していた。

出撃基地への移動

五月二十八日、原町を出陣。この際はそれぞれの機付長のみが後部座席に同乗して前進した。この整備の団は「同行整備班」と称した。原町出陣以降、整備の支援をする機付は各地の飛行場から臨時で差し出された兵がついた。航空機に関する知識が無い、年上の一般兵が日替わりで来る。若い軍属達が彼らに指示するのは大変だったという。

隊は大阪の大正飛行場に前進。原町出発時に二機が遅れた。稲垣少尉と齋藤伍長である。齋藤機の故障に小隊長が随行したものと推測する。彼らが大阪に到着したのは三十一日、本隊が佐賀県の目達原飛行場に移動した後である。横田伍長は大阪を発つ日に発動機

の不良で加古川に降りていた。稲垣少尉書簡によると飛行機は加古川へ残置、本人は大阪の旅館に戻っていたようである。翌六月一日に隊長・渋谷中尉及び力丸少尉、近藤氏の三人で横田軍曹の整備状況の確認と整備の支援のため加古川へ戻っている。後部座席に横並びに座り、窮屈な移動だったという。

横田機の機付・佐藤軍属と共に整備をしたが、この機は発動機を交換し、飛行可能と判断したため渋谷機は目達原に帰還した。横田機は五日ごろ目達原に迫及したが再び不調が続き、近藤氏も整備支援をしたが本隊に合流出来なかった。横田軍曹は終戦間近に生還者二名と万世の飛龍荘で再会することとなる。

目達原では小隊ごと最後の飛行演習として、五島列島に対する薄暮突入の要領を演練した。

目達原では、重爆向けの大規模な整備工場があつて出撃前最後の整備が実施された。訓練、整備と余念がなかったが、待機期間が長期に亘ったこともあり操縦者と整備班員で何度か博多へ

遊びに行ったり、目達原や鳥栖の町を出歩く余裕もあった。



目達原飛行場から出陣。後部座席には機付が同乗した。

国華隊出撃

万世へ前進。出撃地である万世では戦闘整備のみ。ここにおいて後部座席および整備工具などの付属品を撤去した。機体は掩体壕に分散隠蔽して偽装したという。飛行場は赤土と砂が混じった地質で、離着陸が無い間は絶えずロードローラーで地均ししていたという急

造の飛行場だった。一度エンジンを起動すると砂が一面に舞い砂だらけになって油に付着してしまふため、拭き取るのは非常に手間だった。

このとき操縦者と整備班が大阪以来同じ宿舎であったところ別の宿舎に入ることになる。操縦者は加世田の飛龍荘、整備班員は同じく原町から前進してきた六十三振武隊整備班員と共に万世の大崎郵便局向かいの民家二階を宿舎とした。彼等の給養面の待遇は地上勤務者に戻り、高粱めしを出される事になる。

万世では朝、飛行場に出かけ機体の整備作業を夕方まで実施、操縦者は日中待機して命令が無ければ明るい内に引き揚げたという。六月十日（出撃前日）、朝より空襲警報があつた。解除と同時に給油作業開始。力丸少尉から燃料タンクは中央のみ、と指示があつた。機付長は燃料を全部抜いて操縦席の切り替えコックを、入れようとする燃料タンクに切り替えて待機する。給油車（人員・上等兵一名）が回つてき給油するが、この時近藤氏は「これ

をやるから満タンにしてくれないか」と、今まで貯めていた航空糧食を両手に抱える程渡して燃料満載にしたという。巽少尉が帰ってきて欲しい一心で危険を冒したとのことである。

給油作業は、機付長が左翼に乗り、ノズルを給油口に入れ、飛行場の兵隊や給油車の上等兵が交代で車両の側面に付いたハンドルをふいご状に押し給油し、油面を確認したのち操縦席の燃料計で満載を確認して終了である。巽機の場合はその都度操縦席に入りコックの切り替えを実施して満載にしたのである。(左右のタンクは繋がっているため給油口は一つで完了する。)

昼十二時、出撃命令が出ると同時に最後の整備に入った。この日は慰問演芸を皆で見て、「いつ死ぬかわからないから」と操縦者・整備員交えて隊員宿舎「飛龍荘」で宴会が行われた。疎開した農民が畑に隠した甕の芋焼酎を水筒に汲んできて酒宴をする。水で割る事はせず、全員がそのまま飲んだ。(原町宿舎の柳屋、目達原宿舎の西往寺でも酒宴は行われている。)

出撃日の十一日、現地召集の兵隊と共に飛行場の端まで機を押しいき飛行場の爆装班が来て爆装。安全栓(二股のピン)を抜き、信管の安全装置である風車の孔に操縦席から延びた安全針(針金)により固定、機上から引き抜けるようにしてあった。針金を引き抜くと風車が風圧で弾頭から外れ、信管が「生きた」状態となり起爆可能となる訳である。なお、爆弾は投下可能であり、国華・神州両隊とも通常攻撃を示唆する訓示がなされているのは興味深い。

この日の薄暮、隊はついに攻撃となる。万世飛行場は曇りで入道雲が浮かんでいたという。一気に敵に撃墜されないよう小隊ごとに別れての前進であった。巽小隊は隊の行動計画上、一番先に離陸することになる。離陸の十分から十五分前、暖気運転のため力丸少尉の「回せ」の指示でエンジン始動。操縦席に乗り、飛行場の兵隊(臨時の機付)が転把を回す。(起動車は使用しなかった)回転数が上がってきたところで機付長の「クラッチ良し」の号令

によって機付がクラッチを繋ぐとエンジンが起動。全回転まで回転数を上げ、操作部位の点検、計器類の数値が正常か、異音・振動等の異常の有無を確認し、左手を上げて地上(機の左側)にいる巽少尉に「異常なし」の合図をすると翼を伝って乗ってくる。ここで「異常ありません」と報告し、交代する。この時手紙と軍刀、首に掛けていた飛行時計を受け取った。やがて巽少尉は手を左右に振り「車輪止め外せ」と指示する。機付が車輪止めを外し、手を前方に振り「前へ」の手信号で機は滑走し海の方に向かって離陸していった。見送りは飛行場の隊員だけであった。

隊の出撃後、整備員たちは天幕張りの戦闘指揮所(ピスト)で待機していたが、二時間くらい経って整備班長が飛行場の本部指揮所で突入の無線を聞いたと言ってきた。(指揮所はピストからは離れているが、同形式の天幕張りという。)近藤氏は操縦者に生きて帰ってきて欲しい一心であったという。当時の日記にも彼の激しい動揺や、突

入を喜ぶ力丸少尉への反感が記されている。



国华隊出撃風景。胴体下に爆弾が見える。
無線機非搭載の下士官搭乗機

が無線の記述は事実と重なるので興味深い。小隊長の名が判別可能ということとは、各機（無線機搭載機）ごと固有の識別符号を付与されていたと推察する。

※異小隊は記事と異なり嘉手納湾攻撃が任務である。

主力出撃後の動向

整備班が宿舎に帰ったのは夜八時頃。そして夜九時半ごろ「知覧飛行場に一機不時着、操縦者無事」との報がもたらされた。飛行場に着陸しているために、整備工具を携行し三輪自動車で知覧に向かった。この時の人員は力丸少尉・近藤氏ほか軍属一名である。異少尉が帰還したのでは、との期待を胸に知覧へ向かったものの、実際に帰還したのは鈴木伍長であった。力丸少尉へエンジンの不調との報告があった。力丸少尉が近藤氏に命じて試運転、力丸少尉が同乗しての試験飛行を実施したが、異常が見つからなかったとの事である。

（読売報知新聞 昭和二十年六月十四日）

当時の記事ゆえに資料性は疑われる

曹機の機付長・飯野兵長と共に飛行場の三輪自動車で事故現場に向かう。墜落は十一日の夜八時頃との情報であった。状況から判断し、整備工具は持参しなかった。現場に急行すると飛行機は大破である。仕方なく橘軍曹が手当を受けていた民家に立ち寄り、宿舎に帰った。橘氏の回想文によれば悪天候で敵が発見できず反転、迷ったうえ燃料切れで山中に墜ちたという。

知覧に不時着した鈴木伍長は、一週間整備ののち同地から単機、薄暮攻撃を命じられて出撃している。この時も再度帰還した。報告は同じくエンジン不調というが、やはり地上では異常なかつたという。鈴木伍長が隊の出撃の状況を回想して記した六月二十五日付書簡によると、「飛行場発進〇時間エンジン調子急変し黒煙ヲ吐く」同二十八日付書簡には「我が機は他の機より燃料の消費大にして途中必ず燃料切れ海中に没して居たことせしやう」とあった。六月二十四日付書簡によれば「雨中一心に整備をなすも未だ飛べず」とある。七月三日には「飛行機も整備

完了し何時でも出撃出来得るようになりました」としている。

この頃になると第六航空軍の組織的特攻も終盤を過ぎて居り、書簡を見るに本土に敵が接近した場合は出撃する待機要員の色が濃かったのかもしれない。「日本の空襲人」の年表によると、この頃九州地方は連日空襲にさらされていたようであり、近藤氏は親に買つて貰つたカメラを空襲で失つている。写真も沢山撮影していたとのことで、貴重な資料の損失が惜しまれる。七月二十四日になると「朝から晩迄寝るのが仕事にて演習もなく三日か四日に一回試験飛行をやるのみ」とある。このような待機状態のまま終戦を迎えたようだ。

なお、鈴木機の際出撃・帰還を境に、同行整備班と隊員は全くの別行動に移行した。

引き続き民家を宿舍として力丸少尉の指示により万世飛行場の他部隊の九式襲撃機や二式複座戦闘機の整備支援を行っていたのである。

終戦・復員

八月十五日、終戦の知らせは万世で、力丸少尉から聞いた。飛行場から一から二升の米を支給され雑糞に入れて携行、福岡の力丸少尉の実家に一泊したのち整備班全員で汽車に乗り、生米を齧りつつ原町飛行場へ戻り、正式に除隊（解雇？）となり復員した。整備の仲間とは戦後文通があつたがしだいに途絶えたという。

飛行機の整備技術は現在もバイクの整備に活かされ、今なお現役で働いて居られる。

あとがき

飛行機は整備なくして飛ぶことは出来ない。地上勤務者の技術と努力があつてこそ特攻が成り立った事もまた忘れてはならない事実である。現代人の価値観をもつて特攻作戦の是非、隊員生還の是非は論ずる事が出来ないが、万全な態勢で送り出さねばならない立場、出撃すれば死にゆかねばならない立場、それぞれ苦悩を抱えて任務に挑んだのではないだろうか。

補足一 整備

本稿では整備に関係する部隊を整備中队・整備小队・同行整備班としたが、用語の違いはあるかもしれない。これは戦闘整備に分類され、その任務は「飛行二即応シテ飛行部隊自ラ実施スルヲ本則トスル整備ヲ謂ヒ」其ノ主ナル作業ハ点検整備、小修理、発動機及「プロペラ」ノ換装ス（「飛行機整備要領」より）と規定された。整備に関する点検は「小点検」「中点検」まで、飛行場には整備中队とは系統が異なる後方整備機関（名称不明）があり、格納庫エンジン等を分解し細部まで点検・整備する「大点検」を実施した。これらは使用時間に対しての周期に基づいて実施されたという。

※原町の後方整備は「第二格納庫」で実施された。

補足二 航空爆弾について

前掲の久木田・橋手記には五百キロ爆弾の記述があり、これについて近藤氏は完全に否定している。砂地である万世飛行場は五〇〇キロ爆装の場合機体が沈んでしまい、また滑走距離も短

く離陸には無理があったと回想している。

補足三 燃料について

※燃料量・重量は、取扱説明書によると中央タンク二六六リットル、前縁タンク一三〇リットル、後方タンク一〇六リットルとあり、中央タンクのみは他機に比較して、翼機は相当な重量がかかったと思われる。

※出撃時以外の飛行は全て燃料満載であった。

※出撃前の燃料給油は中央タンクのみと整備班長に指示したのは、隊長なのか現地指揮官なのか不明である。

※「片道燃料説」自体が悲劇の対象と捉えられるかも知れないが、目的達成のため機種・爆弾の重量や飛行距離から燃料量が算出されたと考えるのが妥当ではないだろうか。

補足四 近藤軍属の服装について、他

※軍属たちは、日常の整備・演習での同乗や、万世に移動する間は、ほぼ第二種作業衣袴（つなぎ）と作業帽を着用していた。※近藤氏は、隊長機に同乗し、銚田教導飛行師団司令部に行く

事もあり、（三〜四回）この際は航空服、飛行帽、縛帯を着用し落下傘を持参した。

※近藤氏は原町出陣の時、手荷物の袋の中に航空服を入れていった。大阪や博多への外出時、「汚れた作業服では恰好がつかない」という理由で航空服・航空長靴に略帽姿であったという。

※操縦者たちは、出撃時も含め落下傘を携行した。キ・五一では落下傘を縛帯に吊るし、尻に敷く形で座席に収容するため落下傘なしに搭乗は不可能である。誤解もあると思われるので特に記しておく。

本稿は以下の資料を参考にさせていただいた。

・戦史叢書「沖繩・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦」朝雲新聞社

・「あかねぐも」原町飛行場関係戦没者慰霊

頭彰会編

- ・「花吹雪 第六号」高橋圭子編
- ・「特攻基地」反戦出版委員会編
- ・映画「陸軍特別攻撃隊」

・映画「乙女のふる基地」
 ・「空の技術」渡辺洋二著
 ・「丸メカニック 九九式軍偵・襲撃機」

・「九九式軍偵察機・襲撃機取扱説明書」

・「飛行機整備要領」航空総監部

・「日本の空襲人」同編集委員会編

※正確を期すために本稿中、筆者の誤記については逐次修正を考慮しております。頭彰会経由でご指導願います。

おわり

事務局からの報告等

と定時評議委員会

※第一回定時理事会(29・2・21)

(29・3・10)に於いて28年度の事業報告及び決算が承認され内閣府に報告したので会員各位に御報告します。

平成28年度事業報告

一 慰霊事業

1 第37回特攻隊合同慰霊祭

3月26日(土)靖國神社に於いて実施した。参列者は遺族30名を始め来賓、戦友、一般会員等合計208名が参列して英霊奉慰の誠を捧げた。昨年「終戦70周年で戦争のけじめはつけた」との風潮のためか昨年より36名の減少であったが、問題もなく整齐と実施された。慰霊祭後、靖国会館に於いて顕彰会の状況説明及び懇親会を実施した。

2 第65回特攻平和観音年次法要

9月22日(木)の秋分の日、世田谷山観音寺に於いて、同寺と地元駒繫神社との神仏習合による年次法要が実施され、当顕彰会は同法要に全面的な協力をし、整齐たる法要の実施に寄与した。当顕彰会関係参列者は、来賓35名、遺族30名、会員等167名の総勢232名であり、昨年より22名の増加となった。

3 各地慰霊祭への参列等

ア 代表者派遣

(実施時期)	(慰霊祭名)	(場所)	(参列代表者)
3月21日	神雷部隊慰霊祭	鎌倉市北鎌倉	藤田副理事長
4月2日	鹿屋特攻慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	藤田副理事長
4月3日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎空港横	石井理事
10月18日	秋季慰霊祭	靖國神社	藤田理事長
10月23日	特攻勇士之像慰霊祭	大阪市住之江区	金子事務局員
10月25日	神風特攻戦没者慰霊祭	愛媛県西条市	原評議員
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭	さいたま市大宮区	倉形評議員
10月15日	串良基地戦没者慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	石井理事
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭	長野県護国神社	衣笠専務理事
10月10日	原町飛行場関係慰霊祭	福島県南相馬市	水町理事
10月14日	市ヶ谷台慰霊祭	市ヶ谷駐屯地	衣笠専務理事
9月6日	高野山慰霊祭	和歌山県高野町	石井理事
7月9日	大東亜慰霊協議会慰霊祭	靖國神社	杉山理事長
5月29日	豫科練戦没者慰霊祭	茨城県阿見町	小倉理事
5月27日	指宿哀惜の碑慰霊祭	鹿児島県指宿市	羽瀧理事
5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉県千葉市	金子事務局員
5月22日	特攻勇士之像慰霊祭	京都府東山区	原島評議員
5月8日	特攻殉国の碑慰霊祭	長崎県川棚町	藤田副理事長
5月4日	福岡県特攻像慰霊祭	福岡県中央区	飯田評議員
5月3日	知覧特攻慰霊祭	鹿児島県南九州市	岩崎副理事長
4月29日	秋田県特攻像慰霊祭	秋田県秋田市	衣笠専務理事
4月10日	萬世特攻慰霊祭	鹿児島県南さつま市	片山評議員
4月22日	春季例大祭	靖國神社	杉山理事長
4月16日	出水市特攻慰霊祭	鹿児島県出水市	石井理事
4月7日	徳之島慰霊祭	鹿児島県大島郡	原評議員
4月6日	都城特攻慰霊祭	宮崎県都城市	笹理事
4月4日	予科練雄飛会	靖國神社	水町理事

11月13日 回天大津島慰霊祭 山口県周南市 岩崎副理事長

11月16日 神風特攻隊慰霊碑参拝 比島マバラカット 藤田理事長

イ 供花送達

(実施時期) (慰霊祭名)

(場所)

6月11日 義烈空挺隊慰霊祭 沖縄県糸満市摩文仁

二 特攻勇士の像建立事業

平成28度は、沖縄及び茨城の護国神社と調整したものの年度内奉納に至らず像の総数は16体に変化はない。平成29年度は事前調整等準備を周到にして最小限1体の奉納を期し、特攻精神の伝承に貢献すべく努力する。

三 その他の事業

広報事業では、公益紙としての機関紙・会報「特攻」108号〜112号の5ヶ号を発行し、会員・協力団体及び希望者に配布・頒布した。また募集・広報組織を再編成し、募集広報活動の効率化を図ると共に、募集・広報用資器材を作成し、全体委員会委員の活動に寄与した。

四 会員の動向

平成28年度における新規入会者は120名、逝去等による退会が222名であり、会員数は102名の減員となった。平成28年度末会員数は1870名に減少した。昨年は初めて会員の増加となり光明を見出したが、今年は減員となり再び厳しい状況になった。平成29年度も一般会員・遺族会員の支援・協力を受け、全体委員会委員を中心とした募集により若手 会員の獲得に努力し、特攻精神継承基盤の確立に努力する。この際特に遺族会員の子弟等の入会を重視し、もって特攻精神の伝承に寄与させる。

入会者のコメント

昨年10月に当顕彰会のホームページからオンラインにより入会されたスイス在住の石川様の入会申込み時のコメントをご本人の許諾を得ましたので紹介します。

当顕彰会としましては昨今、世界各地で発生している自爆テロとは似て非なることについての海外への発信に全面的な支援をしたいと思います。

石川瑠璃

(会員No. 92624)

特別攻撃隊の方々、ご遺族、ご家族の方々の国を愛し、人を愛する真摯な思いに深く感銘を受けて当時の様子などは是非、顕彰会の皆様にご教示頂きたいと願っております。

スイスを拠点に言語学・社会科学研究を行っておりますが、近年海外の学際やメディアで目立つ特攻という概念に対する各種の誤解を解きたく、なにぶん微力ではございますが学術論文の発表を通して、「人として」の特攻隊の皆様のお姿を語り継ぎ広めたいと存じます。

何卒よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

平成28年度正味財産増減計算書

平成28年1月1日から平成28年12月31日まで

(単位:円)

科 目	28年度決算	前年度決算	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
基本財産運用益	8,850,967	8,288,897	562,070	
特定資産運用益	263,274	853,000	△ 589,726	
受取会費	4,312,000	4,853,000	△ 541,000	
慰霊事業収益	1,909,000	2,171,000	△ 262,000	
出版事業収益	84,780	76,120	8,660	
広報事業収益	1,600	2,400	△ 800	
受取寄付金	4,705,968	4,778,380	△ 72,412	
退職引当金取崩	1,452,000	0	1,452,000	退職(2名)
雑収益	1,198	2,129	△ 931	
経常収益計	21,580,787	21,024,926	555,861	
(2) 経常費用				
慰霊事業負担金	961,250	775,415	185,835	
像制作負担金	0	1,312,000	△ 1,312,000	
発送等委託費	1,938,050	4,840,141	△ 2,902,091	
支払助成金	1,323,200	1,523,400	△ 200,200	
役員報酬	340,000	400,000	△ 60,000	
給料手当	6,130,470	3,998,200	2,132,270	引継期間分人員増
福利厚生費	898,406	579,695	318,711	
旅費交通費	2,825,835	1,935,760	890,075	
通信運搬費	556,796	531,646	25,150	
減価償却費	80,465	91,742	△ 11,277	
退職手当	1,452,000	0	1,452,000	退職(2名)
消耗品雑費	861,127	539,418	321,709	
印刷製本費	2,243,271	5,638,768	△ 3,395,497	
会議費	164,225	126,431	37,794	
光熱水料費	116,598	110,265	6,333	
賃借料	2,219,052	2,068,392	150,660	
諸謝金	245,000	85,000	160,000	
雑支出	0	0	0	
退職手当引当資産繰入支出	556,000	182,000	374,000	
経常費用計	22,911,745	24,738,273	△ 1,826,528	
評価損益等調整前経常増減額	△ 1,330,958	△ 3,713,347	2,382,389	
有価証券売却損益	1,048,100	510,800	537,300	
基本財産等評価損益	△ 11,055,240	△ 3,578,224	△ 7,477,016	
当期経常増減額	△ 11,338,098	△ 6,780,771	△ 4,557,327	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
指定正味財産からの振替	0	0	0	
貯蔵品等資産増	50	3,752,980	△ 3,752,930	
経常外収益計	50	3,752,980	△ 3,752,930	
(2) 経常外費用				
法人会計から公益へ振替	0	0	0	
貯蔵品資産償却	0	287,520	△ 287,520	
経常外費用計	0	287,520	△ 287,520	
当期経常外増減額	50	3,465,460	△ 3,465,410	
当期一般正味財産増減額	△ 11,338,048	△ 3,315,311	△ 8,022,737	
一般正味財産期首残高	295,000,505	298,315,816	△ 3,315,311	
一般正味財産期末残高	283,662,457	295,000,505	△ 11,338,048	
II 指定正味財産増減の部				
一般正味財産への振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	283,662,457	295,000,505	△ 11,338,048	

寄付者御芳名(敬称略)

(平成29年1月1日~3月31日)

(単位千円)

一〇〇〇	多田野 弘	七	藤永 雅彦	七	桜井 實	二	田中 誠治	二	阿部 敏行
七七	山根 秋男	七	竹岡 晴人	七	浮世 喜昭	二	関根 賢治	二	小川 弘子
四七	吳 奈々子	三〇	岡本 巖	七	服部 武志	二	澤田 江里子	二	川田 久四郎
二二	降矢 達男	二〇	松中 義昭	七	森山 房夫	二	丸橋 安夫	二	樋口 太
二〇	柿崎 裕治	一〇	藤元 正明	七	早田 亮彦	二	須田 里吉	二	平川 善人
一〇	森山 正義	一〇	河野 茂義	七	下森 康玄	二	箕輪 敏	二	布施木 昭
一〇	高橋 芳幸	一〇	伊藤 元夫	五	小林 正昭	二	大賀 龍吉	二	木下 矩武
一〇	鈴木 敏博	一〇	新井 重雄	五	臼田 智子	二	佐伯トシ子	二	岩井 良平
一〇	むらさき会(陸士56期)	五	竹本 佳徳	五	鍋谷 欣市	二	宇井 忠一	二	土橋 猛
一〇	松本 司	一〇	岩崎 茂	五	齊藤 達人	二	小貫 達雄	二	田中 正和
一〇	原島 淳子	一〇	飯田 雍子	五	堀江 正夫	二	古屋 七郎	二	江副保次郎
一〇	外海 信雄	一〇	林 陽一	五	飯田 正能	二	清水 典郎	二	長谷川知幸
一〇	辻本 浩司	一〇	田辺さだ子	五	三春 仁	二	杉原 清之	二	波多野義昭
一〇	上西 幸子	一〇	若井 雅和	五	田中 清	二	山本 年男	二	岩崎 昭男
一〇	吉田 紀	一〇	荒垣 外司	五	渡部 晃	二	原 照寿	二	廿日出昭信
八	椿 孝則	七	吉田 治正	五	水気 博美	二	樫村 保貞	二	島田 正登
七	大和 誠	七	鮫島美知子	四	小池 末人	二	小堀圭一郎	二	塚原 正
七	原町飛行場戦没者顕彰会	四	湯澤 一枝	四	小森 正明	二	牧 重勝	二	安藤佐智子
七	紺野 邦男	七	茂木 昌三	三	池田 守	二	大澤 和久	二	広瀬 勉
七	小山内昭三	七	花塚真知子	三	木澤 藤男	二	和才 誠	二	細井 秀雄
七	田中 臣二	七	斉藤 俊介	三	根本 紘一	二	鈴木正比古	二	倉重 真澄
七		七	井川 嘉江	七	吉田 文堯	三	阿部 隆裕	三	加藤 千佳
七		七	武谷 孝生	七	大塚 喜衛	三	西村 征夫	三	吉野 信二
七		七	小林 清完	七	久保 巍	二	廣田 正	二	工藤 重民
七		七	藤永 雅彦	七	桜井 實	二	田中 誠治	二	阿部 敏行
七		七	竹岡 晴人	七	浮世 喜昭	二	関根 賢治	二	小川 弘子
七		七	岡本 巖	七	服部 武志	二	澤田 江里子	二	川田 久四郎
七		七	松中 義昭	七	森山 房夫	二	丸橋 安夫	二	樋口 太
七		七	藤元 正明	七	早田 亮彦	二	須田 里吉	二	平川 善人
七		七	河野 茂義	七	下森 康玄	二	箕輪 敏	二	布施木 昭
七		五	伊藤 元夫	五	小林 正昭	二	大賀 龍吉	二	木下 矩武
七		五	新井 重雄	五	臼田 智子	二	佐伯トシ子	二	岩井 良平
七		五	竹本 佳徳	五	鍋谷 欣市	二	宇井 忠一	二	土橋 猛
七		五	岩崎 茂	五	齊藤 達人	二	小貫 達雄	二	田中 正和
七		五	飯田 雍子	五	堀江 正夫	二	古屋 七郎	二	江副保次郎
七		五	林 陽一	五	飯田 正能	二	清水 典郎	二	長谷川知幸
七		五	田辺さだ子	五	三春 仁	二	杉原 清之	二	波多野義昭
七		五	若井 雅和	五	田中 清	二	山本 年男	二	岩崎 昭男
七		五	荒垣 外司	五	渡部 晃	二	原 照寿	二	廿日出昭信
七		五	吉田 治正	五	水気 博美	二	樫村 保貞	二	島田 正登
七		四	鮫島美知子	四	小池 末人	二	小堀圭一郎	二	塚原 正
七		四	湯澤 一枝	四	小森 正明	二	牧 重勝	二	安藤佐智子
七		三	茂木 昌三	三	池田 守	二	大澤 和久	二	広瀬 勉
七		三	花塚真知子	三	木澤 藤男	二	和才 誠	二	細井 秀雄
七		三	斉藤 俊介	三	根本 紘一	二	鈴木正比古	二	倉重 真澄

二	中村 博志	二	福島 隆夫	一	金子 敬志	一	石井 敏子	群馬県	鬼頭 貴子		
二	城ヶ端 専	二	小泉 洋平	一	長堀 守利	一	植田 和男	埼玉県	荻野喜美雄		
二	坂戸 昭之	二	岡部 尚子	一	岡本 久吉	一	横瀬 富一		徳村 忠		
二	若月 良介	二	小林由貴子	一	杉浦 喜義	一	阿部 長男	千葉県	奥本 康大		
二	水野 清	二	安永真理子	一	(公財) 千鳥が淵墓苑奉仕会			東京都	岡崎 規邦		
二	二井 重吉	二	山本 健雄	一	渡辺 由佳	一	渡辺 里佳	東京都	山根 明子		
二	後藤 文夫	二	三宅 好美	一	藤野 洋政	一	山口 高治		佐藤 隆徳		
二	林 佐吉	二	高橋 富二	一	大川 吉昭	一	生田 瑛		曾根田 太郎		
二	川口 建治	二	吉田 和貞	一	吳 正男	一	石井 光政		葛馬 亜希		
二	丸 利郎	二	松本 賢二	一	岩崎 淳治	一	田村 政昭		橘 俊朗		
二	堂坂 清	二	丸原 巧	一	正本 禎亮	一	大林 喜一		永石 久枝		
二	生峯 和代	二	松田 栄	一	加藤 拓	一	天野 弘子	神奈川県	福島 八郎		
二	原田 義治	二	藤井 日正	一	上畑 幸晴	一	村井 健次		水野 和幸		
二	黒田 博	二	高橋こすみ	一	上田 浩寛	一	原田 茂	静岡県	川瀬 守彦		
二	國武 統士	二	濱田 秀逸	一	藤井 孝子	一	牧野 洋子	愛知県	津田 智世		
二	安河内康彦	二	菅原 春生	一	近藤 敬子	一	東 門弘	三重県	中澤 和美		
二	佐藤 義信	二	原口 静彦	新入会員名簿 (敬称略)				京都府	森澤 勇司		
二	上嶋 正敏	二	牧 勝美	(平成29年1月1日～3月31日)				兵庫県	竹内 義定		
二	古閑カツ子	二	市来 徹夫	北海道				奈良県	増井 康真		
一	齋藤 忠信	一	埼玉偕行会	青森県				山口県	森山 房夫		
一	金子 亘秀	一	後藤 昭一	宮城県				香川県	吉田 紀		
一	手塚 巖	一	中村 貞三	山形県				鹿児島県	朝倉 素雄		
一	藤田 幸生	一	小倉 利之	福島県				鹿兒島県			
一	衣笠 陽雄	一	羽瀧 徹也	群馬県				天笠 洋	奈良 浩	会員訃報 (敬称略)	

謹んで哀悼の誠を捧げます

青森県	畝田謹次郎	(29・1・20)
岩手県	細谷賢吾	(29・1・22)
秋田県	浅田嘉美	(28・11・4)
福島県	濱崎次郎	(28・4・7)
群馬県	武井光司	(28・11・11)
埼玉県	永石辰郎	(28・8・11)
東京都	大久保武司	(29・1・1)
	岩井良雄	(27・11・27)
	伊勢敬一	(28・10・25)
	原武廣	(28・12・24)
	飯田正能	(29・4・19)
	寺井俱子	
	宮地正美	
神奈川県	伊藤忠吾	(28・12・16)
長野県	滝沢邦夫	(28・12・23)
岐阜県	黒木長九郎	(28・2・4)
大阪府	川村温夫	(27・7)
	藤澤長次	(29・1・24)
	日笠泰男	
奈良県	北山禎彦	(27・9・7)
	牧徹	(29・1・6)
岡山県	永島卯太郎	
広島県	田中清	(28・12・31)
長崎県	福島良岡	(29・1・11)
熊本県	荒木孝	

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のごことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <http://www.tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、17字詰めでお願いたします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会事務局にお任せ願います。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしません、必要な場合はその旨お書き添えください。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記の当顕彰会事務局宛てとさせていただきます。

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596